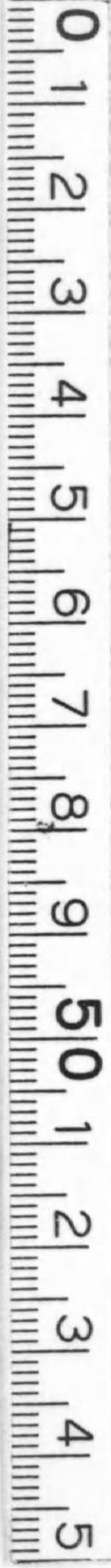


910.26-Ma26ウ



1200500582861



始



前田晁著

明治大正の文學人

昭和十一年三月

910.26-Ma26ウ

目次

前田 泉 著

明治大正の文學人

東京大学図書



I種

W



1200500582861

文學二十五年間	二
坪内逍遙先生とH・Eの事	四
二葉亭主人の事	五
金一圓の原稿料	五
『二葉亭全集』第三卷	六
島村抱月氏	七
茅ヶ崎に於ける國木田獨歩	七
中澤臨川氏の思ひ出	七
『文章世界』のこと	八
『残雪』と人間苦	八

年齢に關した事を	一四
『再び草の野に』を読む	一五
田山さんの事	一六
花袋氏と讀書	一六
誤られた逸話	一八
田山花袋の一面	二〇
田山さんの『近代の小説』から	二〇
島崎藤村氏の『海へ』	二六
田山花袋氏の印象	二二
上司小劍氏の印象	二〇
片上伸氏の印象	二七

吉江喬松氏の印象	二四
中村星湖氏の印象	二五二
思ひ出の一つ	二五九
親不知の嶮へ行く	二六六
有島武郎氏と氏の如き態度にある作家に	二七九
批評家の尺度	二九七
文壇生活の第一印象	三〇四
本然の姿を見失ふ	三二四
数人の作家の噂	三二六
二つの退屈	三四〇
燈火親しむべき頃	三四三

築城師の覺悟	三五六
讚のはうへ逃げる	三六三
後記	三七七

明治大正の文學人

文學二十五年間

—

このごろ「新人生派の擡頭」といふ聲がしきりに方方で聞えてゐる。あるひはまだ、さういふ要望の聲ばかりであつて、それに應へる作品はこれと言ふほどのものがないのかも知れないけれども、とにかく、まじめな眞剣な文學を求めていることだけは察せられる。なぜなら、新人生派といふ言葉のうちには、この人生の見方に於いて、いかなる意味でか現實に深く徹しようといふ意圖の叫びが強く響いてゐるからである。

で今さういふ叫びを耳にしながら、卒然として過去二十五年間の文學のことを

想ひ返して見ると、その變遷推移のうちに、いかにしばしばこの同じ要望の聲が叫び返されたかに驚かされる。實に、いつの時代を取つて見ても、その時の文學が停滯して、何等かの革新がそれに加へられなければならないことを思はせられる時が來ると、きまつてこの聲が起つてゐる。「人生派」の主張は、所詮、それほどまでも常に文學の要素のアルファにしてオメガである。

二

今から二十四五年前、即ち明治三十四五年の交は、ちやうどニイチエの個人主義がはじめて輸入せられたところで、彼の祖述者ともいふべき高山樗牛の美的生活論や本能満足主義の影響の下に、從來、單なる興味で向つてゐたやうな性慾や男女間の纏綿たる情事や罪惡の描寫までが、今は哲學的にも或重大な根據があるものとして見られるやうになつて來てゐた。一見いかにも無意義らしい瑣末な人生の

事象といへども、それが如實に描き出されてあれば、人生の縮圖として必ず何等かの意味がある、讀者に對して何等かの暗示を與へるものになつてゐない筈はないといふことになつて來てゐた。即ち、從來ただ見て楽しむものにされてゐたところの文學が、ここに至つて、人間内省の上に常に何等かの機縁を與へずにはおかないものになつて來たのである。この轉換は實にただ一步にしか過ぎなかつたけれども、文學をして眞の人生の藝術たらしめた重要な契點となつてゐる。

けれども、この寫實主義の時代に在つては、まだまだ作者の手法は外面的であつた。彼等はその作品を生み出す上にゾラ式の實驗をこそ用ゐたが、必ずしもまだ體驗を必要としなかつた。彼等が作り出したところものは、「人生の爲の藝術」であるとは言つても、實はただ人生に暗示を與へるものでありさへすればよかつたので、その作品に對する彼等の態度は、要するにまだ在來の「小説作者」の態度であつた。彼等は自分の作意に適ふやうな材料を方方から取り集めて來て、そ

れを巧みに取捨し按排して一つの作品につくりあげるか、或ひはまた、取つて來た一つの材料の中から發見した意義を自分の作意としてそれに血肉をつけるかした。即ち、いづれにしても、客觀の事象を作者の主觀で統一して、言葉を換へて言へば、作者の私意を挿み、作爲を加へて、興味もしくは教訓をそれに盛らうとしたのである。従つてその目ざしたところは明かに世俗的・道德的であつた。

三

所へ起つて來たのが日露戰役である。「臥薪嘗膽」をそのモットーとしてゐた永い國民的忍苦は十分に報いられて、國民的意識といふ桎梏のうちに永いあひだ固くなつて跼蹐してゐた國民の心は一時にぱつと放たれた。誰も彼れもが久しぶりで繋縛を解かれた自由をその身に感じはじめた。思想界はこゝに一大飛躍をなして、いはゆる個人的自覺がにはかに一般に行きわたつた。ニイチエの個人主義が

この時になつてはじめて眞に流通の道を見出したのだと言つてもいいかも知れない。常に極めて敏感であつて永久に自由を欲して止まない文學者の群が逸早くこの潮流に棹さしたのに不思議はない。彼等はそのころ盛んにはいつて來てゐた泰西の近代思想を或ひは咀嚼し或ひは鵜呑みにしながら、いよ／＼ますます自己意識を強めて行つた。そして、自己一個の體驗を以て、人類全體の體驗を髣髴させることが出来るといふ深い自信と自負心とから、自己一個の生活の種々相を根こそぎ暴露することを敢てした。實に、彼等に依れば、一人の心は萬人の心であるが故に、彼等自身の戀愛の、もしくは家庭の、もしくは社會の、もしくは乃至一切の悩み（或ひは喜び）は即ち人類全體の戀愛の、もしくは家庭の、もしくは社會の、もしくは乃至一切の悩み（或ひは喜び）であつて、所詮、彼等自身の個は同時に全なのである。而して、この個にして全なる彼等自身の體驗を彼等が敢て再現するのは、それに依つて、人類が自己の眞の姿を曇りなき鏡裏に見るが如く

に見ることを得て、つぎの幸福な時代をつくる上に役立たしめんがためである。即ち、彼等は殉教者の悲壯な意氣を以て彼等自身の現實を暴露したのである。これが實に日露戦後に異常な勢ひを以て勃興して來た自然主義者の態度であつた。

同じく「人生のための藝術」ではあるが、前の寫實主義とこの自然主義とがいかにか違つてゐるかには容易にわかるであらう。前者は外部から事象を觀て描いた。後者は事象の内部にこそつてゐる自己を描いた。前者は實社會の表面を描いて見せたが、後者は現實の眞を描いて人生の意義に到達しようとした。彼れに在つては、いはゆる寫實で能事は足りたが、これに在つては、寫實以上に内部の生命を生かさなければならなかつた。のみならず、一點一畫といへども偽りのない赤裸裸の姿でなければ、つぎの時代の改造のために何等の寄與をもしないであらう。自然主義の作家達が「迫眞」をそのモットーとした所以である。彼等は寫實主義者達が客觀の事象を主觀で統一したのに反して、却つて主觀を客觀化した。いかな

る事象といへども、彼等は一旦それを自己の主觀のなかに取つて、「萬人の心である自己」の體驗とした上でなければ再現しなかつた。そしてそれが再現される時には、作者の主觀の中で萬人共通の眞、即ち世界的、人類的の眞となつてゐた。

この蔽ふものなき「眞」を求めるために、彼等は愈々主觀を磨いた。事象を寫す鏡面を明澄にしたのである。彼等はまた、ややともすれば「眞」を蔽うて晦まざうとする一切の障礙を排除し盡さうとした。在來の形式に反抗したのも、因襲の打破や偶像の破壊に突貫したのも皆その現はれである。

實際、この文學上の運動の何といふ猛烈さであつたことか！ それは嘗に文學界を風靡し席卷したばかりではなかつた。一般社會の上にも異常なセンセーションを巻き起した。日常道德の軌範なども、この運動のために手痛く影響されて、文學の社會的浸潤が漸く根深くはじまつた。

四

けれども、この自然主義の精神はいかにもせつばつまつてゐた。餘裕といふものが少しもなかつた。常に人生の死活問題に當面してのみゐたと言つてもいゝくらゐであつた。これが人間の性情の全部に愬へ得るものでないことは明かである。その地その境涯に安んじて悠々自適の生を送つてゐるものもある世の中である。この逃避的な人々に取つては、自然主義の文學は恐らくはあまりに荒過ぎ強過ぎたであらう。明治四十一年のころにはゆる餘裕派の文學が一方にあつたのはそのためである。

けれども、これは明かに傍流であつた。現状打破と改造との精神を逸したものは決して本流となり得ない。凡そ人生の營みは一切のものがつぎの時代をよりよくせんがための準備に費す努力に外ならないからである。

五

時の推移はしかし遂に自然主義をも老いしめずにはゐなかつた。と、やがて、これに代つて後の文學を樹てようとしたものが起つて來た。雑誌『白樺』に據つた人道主義の一派である。明治の末葉から大正のはじめにかけて、この派の運動はさかんであつた。

これより先き、自然主義者達はしきりに人生の「眞」を追窮しつゞけてゐたが、悲しいかな、彼等は人間の實生活の上から言つて厭ふべき「醜」と「惡」と「暗黒なもの」とのみを得た。しかも彼等はこの堪へがたき人生の「眞」を忌憚なくいつまでも描きつゞけて居た。

希望を持つて生れ出て來た若い時代に取つてこれはやりきれないことだつた。のみならず、自然主義の運動はいつまでも破壊に力を入れて建設をまつたく閑却

してゐた。従つて、内容としての人生的意義がいつまでも稀薄なままでゐた。この歴倒的な潮流に押し流されて多くのものは絶望して倒れて行つた。が眞に生きようとしたものもまたあつた。『白樺』の一派もそれである。彼等は勇氣を奮つて反撥した。彼等は自然主義の「醜」と「悪」と「暗黒なもの」とに對して「美」と「善」と「光明なもの」とを目標として打ち立てた。彼等は現實を踏み越えて理想を求めた。その氣分は若かつた。その調子は明かるく朗かだつた。平民的に對する貴族的、ニイチエに對するトルストイ、これが彼等の特色だつた。彼等は次第に地歩を文學界及び思想界に占めようとした。そして幾らかそれに成功した。多少の希望を彼等が人生の上に吹き込んだことも事實である。

けれども、いかにしても彼等は若すぎた。のみならず、つひに御曹司式でありつゞけた。人生の眞相どころか世間の苦勞の一つをだも知らなかつた。と言つては言ひ過ぎるかも知れないけれども、彼等の立てた幼稚な理想を以てしては年老

いてよぼよぼになつた自然主義をすら押し倒すことが出来なかつたのは否めない。自然主義は今だになほ時代おくれの腰をぼろよぼになつた蓆の上に据ゑてゐる。

六

世界大戦役に續いたヨーロッパの社會革命がわが國の文學に及ぼした影響は容易に看過することが出来ない。『白樺』一派のあまりに幼稚な理想文學のあとへ再び切實な現實文學であるところのプロレタリアの階級意識が出て來たことは非常に興味がある。彼もこれも共に「人生派」の主張こそ持つてゐるが、その質は、實際、文字通りに雲泥の差がある。これの社會革新と彼れの心理革新と、同じく革新を要望してこそあるが、その手段はまつたくちがつてゐる。彼れは酔ふこともない甘酒であり、これはやがて何物かを焼く火酒である。

大震災以來、かのプロレタリアの文學はほとんど發表機關を失つて頓に屏息してゐたが、近ごろ、多少またその芽を焼跡から出しはじめたやうな形である。けれども、まだその戰闘準備は容易に十分には整ひさうに思へない。されば、獨りあとに残つて榮華を極めてゐたブルジョア文學が當今心に驕つてゐるがごとき姿はあつても、プロレタリア文學がこれと相競ふ日の來るまでにはまだ暫くの間があるであらう。

けれども、ブルジョア文學はいかにしても今弛緩し過ぎてゐる。技巧のための技巧に憂き身を窶したり、争つて新聞の通俗物に構想の新奇を衒はうとしたり、自己の生活に何の關係もない架空の生活を作品に盛つて世間の喝采を博さうとしたりしてゐるところは、ちやうど二十五六年前の硯友社一派が安きを偷んでその

目を糊塗してゐたのによく似てゐる。すなはち「新人生派」の氣運を喚び起さうとする聲の一方から聞える所以であらう。

—『日本電報』電通二十五周年記念號・大正十四年十月—

坪内逍遙先生とH・Eの事

たしか明治三十八年のことであつたか、とおぼえてゐるが、或ひは三十九年であつたかも知れない。その頃、わたしは本郷の龍岡町の下宿屋にゐた。夏のはじめのころであつたと思ふが、或日、坪内先生のところからはがきが来て、ちよつと聞きたいことがあるから、これを見次第すぐに来るやうにといふことであつた。わたしは取りあはず大久保余丁町のお宅に参上した。もとのお宅で、今のお宅の東北に當つたところにあつた。門から玄關までが可なり長く、そのころ、犬を飼はれてゐたやうにも思ふが、さて、どうであつたか。二階へといふことで、お書齋に通されたが、何かきつと叱られる事にちがひないといふ豫感がしてゐたの

で、わたしは小さくなつて敷居際にかしこまつた。

もつとそばへ、といふ先生のお言葉で、座蒲團のあるところまで進むと、先生は机に向はれたままで、机越しに大きな目をぐつとわたしに据ゑて、

「君は、H・Eといふのが電車の運轉手になる運動をしてゐるといふことだが、知つてゐるか」といはれた。

わたしはわけもなくはつとしたが、躊躇してゐるところではなかつたから、

「はい、知つてゐます」と答へた。

「知つてゐるのか、君は！」と先生は、少し聲を大きくされて、「知つてゐて、なぜ黙つてゐたのか？」

「……………」

わたしは答へる言葉を知らなかつた。H・Eといふのは、わたしと同級で、三十七年の二月に一しよに學校を出たのだが、いい就職口がなかつたので、あれやこ

れやといろいろとあがいたものの、時は経つし、下宿料はたまるし、芽の出さうなあてはからつきしなかつたところから、すつかり腐つて、久しく懊惱、煩悶、思案に思案を重ねた末に、つひに悲壯な大決心で、そのころ募集してゐた電車の運轉手にならうとしたのであつた。電車といつても、そのころはまだ市内電車ばかりであつて、それもまだ市電に統一されずに、私設の三會社が鼎立してゐた時代であつた。H君は、初めは車掌になるつもりで、そのはうを志望したのだが、近眼のためにどこの社でもはねられた。ただ東京電氣鐵道といつたかと思ふが、外濠線を経営してゐた會社だけが、運轉手になれば採用してもいいといつたといふので、さてこそ運轉手志望に轉向したのであつた。

この問題は、H君の下宿が神田明神脇で、わたしの下宿と近かつたためもあつて、初めからわたしは相談相手にされてゐた。就職難といふことは、一般には今日ほどにひどくはなかつたにしても、中等教員となつて地方へ赴くことを肯んぜ

ずに、東京に居残つた者は、やはり、大抵、苦しい目に遭はされたのである。わたしなども、三十九年ならば、幸ひに坪内先生の御推舉で博文館に入つて、『文章世界』の編輯をしてゐたから、先づ先づほつとした形であつたが、三十八年には、幸田露伴氏の門下の村上濁浪といふ人が經營してゐた『成功』といふ雑誌のために、アメリカの雑誌『The Success』から、主筆のマーデンの言説や何かを翻譯したり、又、時には『成功』の訪問記者となつて、談話筆記を取り歩いたりして、その安い原稿料で、辛くも下宿料を拂つてゐたのである。

實際、H君にして見ても、運轉手にならうといふまでには可なり苦しい思ひもしたのであつた。わたしも其決心には全く同情して、むしろ賛成さへしてゐたのである。H君は文筆をもつて立たう、といふはうの人ではなかつたから、わたしのやうに安原稿を稼ぐわけにも行かなかつたのである。

が、それを先生に黙つてゐたのが、なぜいけないのか？ わたしは、先生に叱

られるやうにさういはれても、まだ其譯がわからなかつた。

「君は、」と、先生は、わたしがいつまでも黙つてゐるので言葉をつづけられた。「文科の校友が電車の車掌や運轉手になつても、學校の面目にかかはると思はないのか？ さういふ事を聞いたら、なぜすぐにわたしなり高田なりのところへ知らさないのか？ わたしはきのふ、教室で、U君が、H君の運轉手になる保證人を頼まれたと、大きな聲で話してゐるのを脇で聞いて驚いたんだが……」

といふことで、Hのこの問題を先生が取り上げられた事情はわかつた。U氏といふのは、帝大出の文學士で、わたしたちの英語の教師であつたが、年が若かつたので、級の者はみんな特に深く親しみを感じてゐたのである。H君が會社のほうから保證人を立てるといはれて、一も二もなくU氏に頼んだこともわたしは知つてゐた。

勿論、今日ならば、大學出の者が車掌にならうが、運轉手にならうが、少しも

珍らしくはないであらう。が、三十年前には、少くとも、早稻田の文科の卒業生が電車の運轉手になるといふ事には、一種のニュース・ヴァリューがあつた。で、U氏としては、恐らくは、これを興味ある一事件として教師室で同僚に披露したのであつたらう。東北辯の重たいバスで、「H、く、ん、が……」とU氏がにこにこしながらゆるやかに話したであらう様子が、わたしには今も容易に思ひ浮べられる。勿論、U氏もまた、わたしと同じやうに、これが學校の面目に關するなどといふことには、いささかも思ひ及ばなかつたのであらう。

が、坪内先生は、これを興味あるニュースとしてなどはお聞きにならなかつたのである。困つた事が出来た、とお聞きになつたのである。が、H・Eといへば、同じクラスに前田がある。あれは一たい知つてはゐないのか。知つてゐないにしても、あれに聞いたら、Hの様子が分るであらう、といふので、わたしを呼ばれて糺して見ると、知つてゐるといふことであつたから、ちよつと、むつとせられ

たのであつたらう。

で、わたしはいさぎよく、H君の窮迫してゐる事情の一切を、知つてゐる限りありのままに申上げた。

先生はうなづき、うなづき聞かれてゐたが、

「よし、よく分つた。では、運轉手のはうはすぐに止めさせるやうに。勤める口は、きのふ学校の図書館のはうへ話して、こしらへておいたから、下宿も学校の近くへ引越すやうに話しておくれ。神田明神脇では、少し遠過ぎよう。通ひきれまい。で、下宿料は、どのくらゐ滞つてゐるのかね？」

凡そ五六ヶ月分、五六十圓ぐらゐのものでありませうと、わたしもはつきりした額は知らなかつたので、お答へすると、

「よし、その半分だけはわたしが出してあげる。あとは自分で、月賦で拂はせるやうにするがいい。下宿屋などといふものは、半分ほど内金に入れて置けば、

あとは快く待つものだから。」

何といふ先生の周到なお心遣ひであつたらう！ わたしはHの事としてはこれを聞かなかつた。何ともいへない感激が身内を走つて、先生を見上げた眼頭は熱くなつてゐた。

「では、君からよく話して、當人をすぐよこしておくれ。」

といふ先生のお言葉に、わたしは余丁町からまっすぐに駆けるやうにしてHの下宿へまはつた。市ヶ谷見付からは例の外濠線の電車に乗つて。

Hの狭い薄暗い三疊の部屋で、わたしは先生のおぼしめしとお言葉とをそつくりHに傳へた。Hは初めは目を丸くしてぼかんとしてゐたが、そのうちに、顔を歪めて、ぼろつと涙をこぼした。わたしもたまらなくなつて、ぼろつとこぼした。

わたしは、Hを急ぎ立てて先生のお宅へ伺はせると、自分の下宿に歸つて、吉

左右を待つてゐた。

夜になつてHはやつて来た。すつかり元氣になつてゐた。先生のところでお金を戴いて、学校の裏のはうの、學生時代に下宿してゐた素人家にまはつて、部屋をきめて来たといつてゐた。

そして、其翌日、神田明神脇を引拂つて、H君は圖書館の事務員となつたのである。話は、これで一段落だが、それから半年以上も経つた時である。或日、H君がわたしのところへ来て、やつと、あの時、先生にいただいただけのお金が出来たから、お返しに行かうと思ふが、どうだらうといふ相談である。勿論、結構なことだと、わたしは思つたから、賛成して伺はせた。

ところが、間もなくH君は引返して来て、先生はお受取にならないといふ。どうしてかと訊くと、先生の仰有るには、わたしのところから、さういふ風なお金の出て行くのは、君ばかりではない。返つて来るのもあつたり、来ないのもあつ

たりすると、わたしはいいが、うちの者なぞが、つい、あの人は返したが、この人は返さない、などといふ風に考へないこともないとはいへないので、却つて面白くないから、一旦出たものは一切、二度と返らないことにしてある。君のその心持を聞いただけで澤山だ。お金は持つてお歸り。むだにさへ使はなければ、お金はいくらあつてもいいものだ。何かにお使ひなさい。とのことであつたといふのである。

「でも、どうしようか？」と、H君は困つたやうにいつたのだが、わたしは、いつかまた御恩報じをする時もあらうからいただいておいたらよからうといつた。

これで話はまた一段落である。

ところが、H君は其後、どう考へてか、二三年してから、不意に圖書館をやめると、兜町のはうへ行つて株屋の店に入つた。わたしとも自然疎遠になつて、久しく相逢はずにゐる。其後、報知新聞や國民新聞の相場欄の記者になつたといふ

噂も聞いたが、今はまた兜町のはうへ歸つてゐる。今年も年賀状がそつちから来た。

そのH君が、しかし、株屋のはうへ行つてからも、特別にお金持になつたといふ話も聞かないのに、先年、坪内先生の記念事業として、演劇博物館の計畫が發表されて、寄附金を校友などにも募られた時に、わたしたちの同級の者が、ぼつりぼつりと少額の寄附をしてゐた中に、獨り飛びぬけて多額の申込をしてゐたのを、わたしは其何回目かの報告で見つけたのである。

「ああ、H君は、今、先生に御恩報じをしてゐる！」とわたしは其時自分に言つて、感慨これを久しうしたのである。

—『藝術殿』坪内博士追悼號・昭和十年三月十四日—

二葉亭主人の事

—

二葉亭さんにはじめてお目にかかつたのは明治三十八年の九月、よく晴れた氣持のいい初秋の日の午後であつた。今、指折りかぞへて見ると、もう三十三年の昔になる。なんといふ遙かな月日を碌碌と經て來てしまつたことだらう！ わたしは其時、幸田（露伴）さんの門下であつた村上濁浪氏が經營してゐた『成功』といふ雑誌のために、「予が翻譯の標準」といふ題で、お話を聽きに行つたのである。

お住ひは本郷の西片町の十番地で、「に」の三十四號といふのであつた。靜か

な、おちついた屋敷町で、がらがらと明く門を入つて數間、右手に玄關の格子戸があつたとおぼえてゐる。所謂訪問記者の無躰で、恐らくは豫て承諾を得てお訪ねしたのではなかつたやうに思ふのだが、來意を述べると、快く通されたのが玄關から廊下を右に突き當つて左へ折れたところの八疊の座敷であつた。ちよつとした庭が縁側のさきにあつた。

『浮雲』の作者で、『あひびき』『片戀』『うき草』などの譯者である主人の客間である。わたしは當然そこに文學書を豫期して壁際の大きな書棚へ目を擧げた。ところが、驚いたことには、そこには政治や外交の書物がぎつしりと並んでゐるばかりで、文學書といつてはただの一冊も見あたらないのである。夙に大陸經營に思ひを潛め、戦後のロシヤとの國交に強い關心をもつてゐた二葉亭さんとしては、もとより何の不思議もなかつたのだが、その時のわたしは、さういふことは少しも知らない文學青年であつたのだから、もしや人ちがひをしたのではないか、門

札の「長谷川辰之助」は果して二葉亭主人の「長谷川辰之助」か知らと、ちよつと不安な氣もしたくらゐであつた。

が、やがて出て來られた一見容貌魁偉な主人は、座に着くと、なんの造作もなくわたしの要望をうなづかれて、深切に其翻譯談をしてくれた。やはり主人は二葉亭さんに間違ひなかつたのである。お話は深く考へられるといふほどではなかつたが、どちらかといへばぼつりぼつりとつづけられた。が、それがそのまま立派な文章となつてゐたので、わたしはその要所要所をノートに書き留めただけで、むしろそのお話に聴きとれてゐるほうが多かつた。そして自分も其頃、ぼつぼつ翻譯などをはじめめてゐた際であつたから、ふだん疑問にしてゐたことをばそれからそれへとお訊きした。原作者の異なるにつれての文體の問題、コマやペリオドの切り方の問題、適當な譯語の容易に思ひつかない場合の問題等々。……ただ一席のお話で、しかも雜誌の爲の訪問記事であつたのだが、それがわた

しの其後の翻譯態度に非常に大きな影響を及ぼしたことは、今日振り返つて見ると、極めてけざやかである。達人の達識は常に至大の感孚力をもつてゐる。

二

のみならず、この一篇の訪問筆記が運よく主人にわたしを親炙させる機縁となつた。といふのは、それが雑誌に載つたのを見て主人はひどく喜ばれたからである。それで、「來い」といはれて行つたのか、それとも何かまた聴きに行つたのか忘れたが、二度目に訪問した時に、そこにゐた先客に向つて、

「この前田君といふ人は不思議な人だよ。僕のつまらない座談をりつばな文章にしてしまつたからね。」

といつてわたしを紹介した。其人は二葉亭さんの親友の一人であつた横山源之助氏で、天涯茫茫生といひ、主として下層社會の、それも貧民窟の人人の生活を

研究しては發表してゐられた人である。二葉亭さんはよく此人と連れ立つて、切通しの江知勝などへ牛肉を食べに行つたりした。

が、それにしても、今さら自分が褒められたことを茲にわたしが書いたりするのは可笑しいが、實はそれにつづけて其時主人のいつた言葉があるのである。

「僕は自分の哲學として書いておきたいと思ふ事があるんだが、どうも文章が下手なために、自分で書くとなると、文字の末にこだはつてしまつて思ふやうにいかない。それでいつまでも物にならずにゐる。話して筆記して貰つたら、却つてまよつて讀めるやうになるかと思ふ。いつか君の都合のよい時に筆記してくれないか。」

といはれたのである。どういふわけか、二葉亭さんはあれだけの名文家でありながら、御自分では文章に自信がないやうなことをよくいはれてゐた。『浮雲』を言文一致で書かれたわけを話された時にも、自分はいかにしても文章がまづい、

まづいといふよりは書けない。そこで坪内先生のところへ行つて、文章はどう書いたらよいかと尋ねると、坪内先生が、「君は圓朝の落語を聞いた事があるか？」と訊かれたので、「ある」といふと、「あの調子で書いて見たらどうです」といはれた。なるほど、あれなら文章の書けない自分にも出来ようと思つて書いたのが『浮雲』であるといつてゐた。

しかし、ただそれだけの坪内先生のお言葉で、あの名作が出来たとは思ふことが出来ない。二葉亭さんのロシア文學における蘊蓄がたまたま表現の暗示を坪内先生のお言葉に得ただけのことであつたらうと思ふのだが、二葉亭さん御自身は、「自分は文章がまづいから仕方なしに言文一致で書いたのだ」といはれてゐた。實際に文章のまづい人であつたら、どうしてあの名文が書けよう筈であらう。二葉亭さんの文章はうまいかまづいかはおろか、全く書かれた事象を表現する媒体になつてゐることさへも忘れさせる場合が多い。文章もここに至つて完全に其

機能をつくしたものといへるであらう。文章が文章として其巧拙の批判を容れ得る間は、まだ眞の名文とはいはれないとわたしなどは思つてゐる。

が、しかし、ここに一つ注意しなければならぬことは、『浮雲』が出現する以前の文章は、小説をも含めた世の一般の文章は、所謂文章體の文章であつて、それをもし二葉亭さんが書けないといはれたのだとすれば、二葉亭さんの抱いてゐた詩想が、文章體ではすでに到底表現され得なかつたので、さてこそ自由に表現され得る言文一致、即ち今日の所謂口語文を案出したのであつたらうと思はれることである。西洋の新らしい文學の影響を受けた内容が舊來の形式には盛り得なかつたので、文體の革新が行はれたのであつたらうと思はれることである。何も偶然に新文體が生れ出たのではなかつたらう。

ところで、前の哲學問題だが、わたしは無論よろこんでお引受けした。けれども、主人のはうの御都合が容易につかないで、その後も筆記は雑誌に載せるもの

ばかりにとどまつた。主人の哲學の體系は、かくしてつひに實現の機會を得ないでしまつたのである。

三

明治三十九年の二月にわたしは博文館に入つて、三月から創刊されることになつた『文章世界』の編輯に従事した。そこで成功雜誌社へは友人の三津木春影君を後釜に推薦した。三津木君は信州伊那の人で、ミツシヨンスクールにわた關係から、殊に語學に堪能であつた。本來は柳川春葉氏の門下であつたのだが、一面、二葉亭さんを非常に崇拜してゐた。ちやうど下宿もわたしと同じであつたところから、わたしが時々二葉亭さんのところへ出かけて行くのを非常に羨ましがつて、わたしがけふも行つて來たなどといふと、一たい二葉亭さんでどんな人だ、けふはどんな話をしたなどといつても根掘り葉掘りして、わたしの話の中からひそかに

景慕してゐる人の風采を想ひ描いて満足してゐたらしかつたが、そのうちに、次第にそれだけでは我慢が出来なくなつたらしい。二葉亭さんが『其面影』を書かれてゐた頃のことである。或日、三津木君は、

「君、僕は二葉亭さんに書いたものを見ていただきたいと思ふんだが、願ひして見て、紹介してくれないか。」

と思ひ入つたやうにわたしに言つた。
で、そのつぎ、二葉亭さんのところへ行つた時に其事をお話すると、

「それは困る。そいつは御免蒙る」と二葉亭さんは頭から斷られて、「君のやうにただ來て話してゐる分にはかまはんが、さういふ意味でだと、もしや僕が三津木君の前途を過らして、文學の道に引き込むことにならんとも限らんからな。」

といはれた。けれども、ただ逢ふだけなら喜んで逢はうといふことに、結局、はなしがおちついたので、そのつぎには、わたしは三津木君と一しよにお伺ひし

た。二葉亭さんは快くいろんな事を話されたが、しかし、文學上の事よりは寧ろ思想上の事のはうが多かつたやうにおぼえてゐる。その時はだんだんと長座して、つひには鰻めしの御馳走にまでなつたりしたが……さういへば、その時の情景は今もなほありありとわたしの目に在る。部屋は玄關から右に廊下を突き當つたところの中二階の六疊の書齋であつた。やはり奥の座敷と同じやうに、ここにも文學書類は一冊もなかつた。さう大きくもない机の上には硯箱と原稿紙とがきちんとおかれてあるだけであつた。そして主人は、その机を右にしてわたしたちのはうへ向はれてゐた。――煙草の脂でところどころ黒いまだらになつた齒を出してつこりと笑はれた其口許、ふと話の續きを切つて、眉と眉との間に深く皺を寄せられて俯向いた其高い額、ぶるぶるとふるふる指先に急須をぎゅつと握つて、わたしたちの茶碗に茶を注いで下さつた其手の恰好。今もそこにゐますが如くにわたしは故人の面影を髣髴と空間に描き出し得る。ふと手をたたかされると、まだ

若い美しい奥さんが赤ちゃんをおんぶしたまま低い階段のところへ御用を聞きに來られたりした。

四

さて、かうして三津木君も時々お話を聴きに行くやうになつてからは、『文章世界』への談話筆記も、いくつか同君の手に成つたが、その後、同君が不幸にも病氣になつて、房州のはうへ轉地されたりするやうになつてからは、更に宮坂風葦君の手で幾多の談話筆記が『文章世界』に齎された。

宮坂君は名を錦吉といつた。信州諏訪の人で、もとは逓信省の電信島出身だが、後に中等教員の検定を受けて早稻田中學の教師となり、又、坪内博士の中等教科書編纂の助手をもした人である。或ひは二葉亭さんの談話筆記の目ぼしいものでは、同君の手に成つたものが一番多いかも知れない。とにかく二葉亭さんが

ロシアへ行かれる最後の時まで、最も近しく頻繁に伺つてゐたのは宮坂君であつたらう。上野の精養軒に催された送別會にも宮坂君は出席した。

五

送別會といへば、それについても一應は追憶を記しておきたいと思ふ。

二葉亭さんがロシアへ行かれる前に、ロシアの小説家のダンチェンコが日本へ來た。二葉亭さんは殆ど毎日のやうに案内して方方を歩きまはつてゐられたが、その間にあちらへおいでになる下相談なども出來たやうである。

それで、いよいよ行かれることにきまつた時に、田山花袋氏、長谷川天溪氏、及びわたしの三人の間で送別會をしたいといふ相談が出來た。——が、それについてももう一步ぶちまけていふと斯うである。

明治四十一年の六月二日、新橋驛を午後六時半發の汽車で、博文館主大橋新太

郎氏が歐米漫遊の途に上つた。その見送りに行つた歸りに、わたしたちは銀座裏の南金六町の金六亭といふのに寄つて、夕飯を食べることにした。料理はうまいといふ評判の家であつたが、狭い二階の間は天井が低く、風通しが悪くて暑苦しかつた。わたしたちはここで食事をしながら、外國へ行く人、行つた人の話をそれからそれへとした。實に、そのころ西洋へ行くといふことは、まだまだ非常にめづらしいこととされてゐたのである。

で、しぜんと話は、近近立たれる筈の二葉亭さんの事に移つて行つて、その送別會の事になつた。ぜひしよう、一つ大いに盛んにしよう、といふことにはすぐに三人の意見が一致したが、しかし、どういふ方法にしたらよいかといふ段になつて問題が生じた。といふのは、二葉亭さんは、どちらかといふと文壇には交遊が少い。いやむしろ友人を文壇に求めようとせられなかつたといつたはうが正しくらくらゐで、坪内逍遙博士、内田魯庵氏、横山天涯茫々生氏、松原二十三階堂氏

らの幾人かを數へ得られる外には、どういふ人達を友人もしくは知人としてもつてゐるかの見當がつかなくかつたからである。で、結局、交遊團體で送るといふ送別會ではなしに、日本の文壇が日本の文豪を送るといふ意味での送別會をしようといふ事になつた。

けれども、平素文學者を以て任じてゐられない二葉亭さんが、果してさういふ意味の送別會を受けられるかどうか、すこぶる心許ない氣がしたので、わたしは田山、長谷川兩氏の旨をも帶びて、その翌三日の朝、大久保余丁町の坪内博士のところへ御相談に出た。といふのは、二葉亭さんは、坪内先生には非常な敬意を拂つて居られて、わたしたちとお話をされる時でも、大抵は坪内さん、時には坪内先生と敬稱を用ゐられ、坪内君が、といふ風な言葉づかひはめつたにされたことがなかつたくらゐなので、先づ坪内先生に發起人になつていただいて、内田魯庵氏にもなつていただければ、二葉亭さんもいやとはいはれまいと、さう思つたか

らである。

坪内先生は快く承諾された上に、會についての御意見や御注意をもいろいろと話して下さつた。内田さんも快く承諾された。お二人の外には田山、長谷川の兩氏が名をつらねることにした。

けれども、まだ二葉亭さんが何といはれるかが心懸りであつたが、わたしが其旨をもつて西片町のお宅へ伺ふと、ちやうど座には『趣味』の主幹の西本翠蔭君がゐて、やはり送別會をしたいからとて、これは先づ主人を動かした上でと追手から堂堂としきりに攻めかけてゐる最中であつた。そこへわたしがすでにこれこれの案が立つてしまつてゐるから、御出席下さる御都合のいい日を決めていただきたいといふ風に、いはば搦手から、しかも極めて短兵急に攻め込んだので、さすがの二葉亭さんも此奇襲には全くまゐつたらしく、

「どうも坪内さんが筆頭でといはれるのぢやア誠に恐縮な話で、……」

といふやうなわけで、忽ち落城された。

が、日は六日の外には明いてゐないといふので、わたしは大あわてにあわてて事の進行をはかつた。そして案内状には、日本の文壇が文壇の先覺者の外遊を送るといふ意味を明かにして、これを文壇の重なる人人に出した。と、中には逢つた事もない人を送るといふのは變だといつて斷つてよこされた人もあつたが、大抵の人は賛成された。そして五六十人ばかりも集つた。その大部分は主賓とは初対面の人たちであつたが、とにかく非常な盛會であつた。いかに二葉亭主人の人望が高かつたかの證左でもある。

六

會場は上野の精養軒で、日は明治四十一年六月六日であつた。恐らくは文壇が擧つて文學者の外遊を送つた會の最初であらう。記念の撮影をして、『文章世界』

の口繪にしたが、後にこれを繪はがきに作つて來會者へ配つたりした。

さて、デザアトコースに入つてから、内田魯庵氏が起つて、例の有名な「文學は男子一生の事業とするに足らず」といふのが二葉亭主人の持論であるが、といつて、その説の當否に言ひ及ばれたので、二葉亭さんは、やがて挨拶すべき番になると、先づ、今度ロシヤへ行くに就いての抱負を述べられ、自分は新聞社の特派員として行くのであるが、單に通信するだけにとどまらず、日本の文化、日本の國民性をロシヤの民衆に傳へて、本當の日本をロシヤに理解させ、東洋永遠の平和のために、日露兩國民を精神的に結びつけるやうに出来るだけの努力をしたと思つてゐる旨を熱心に披瀝せられてから、自分が文學者をもつて遇せられることは光榮の至りであるが、實は衷心すこぶる忸怩たるものがあるといはれて、一たい文學は眞の天才の士のする事であつて、自分のやうな凡人の到底よくすべきことではない。自分が文學者をもつて任じてゐないのは決して文學を軽く見て

ゐるからではなくて、却つて文學を非常に崇高なもの、自分などの到底手をつけることの出来ないものと見てゐるからであるといふ意味の事を述べられた。

二葉亭さんの眞意が果してどこに在つたか、その穿鑿はとにかくとして、御自分では文學者としてよりは寧ろ志士としてのほうが、國家の爲に更に一層大きな貢獻をなし得ると考へられてゐたであらうとは想像される。前に述べた三津木春影君の場合の事でも、二葉亭さんが文學をどう見てゐられたかの一端には觸れられる。即ち文學は、どこまでも天才の士のやる事であつて、凡庸の徒が漫然と其美に眩惑されて引つかかると、碌でもない一生を送らなければならぬやうなことになるから、ただ好きだからぐらゐで誰でもやつていいといふわけのものではないといふ意味で、主人の信念は固く裏づけられてゐたのである。

さうだ、これは眞理だ。たしかにいつの世にもほろびぬ眞理だ。

さて會が果てると、二葉亭さんは席を立たれた。わたしは坪内先生と二人だけ

で精養軒の玄關まで送つて出た。二葉亭さんは坪内先生に丁寧な挨拶をされてから、

「前田君、では御機嫌よう！」

と、わたしにもにこやかな笑顔をもつて聲を残された。

わたしは深くお辭儀をして、やがて二葉亭さんの夏外套を着た大きなうしろ姿が外の闇へ、鐘樓のはうの木立の蔭へ没して行くのを坪内先生と共にポーチに立つて見送つてゐた。

これが最後のお別れであつた。

七

翌年の五月十三日、印度のベンガル灣で不歸の客となられたといふ飛報がわたしたちを驚かしてから二十數日の後、染井の齋場で告別式が営まれた時に、その靈

前で島村抱月氏が始めて言文一致の弔文を読まれたことをも序でに記録しておきたいと思ふ。

言文一致の創始者に言文一致の弔文がふさはしいといふだけの意味ではない。すでに全く口語文の世の中になつた今日ではちよつと想像がつかないかも知れないが、當時、言文一致は小説以外の一般の文章界にも次第にさかんになりつゝあつたにもかかはらず、一部にはなほ言文一致は卑俗であつて、到底莊重謹嚴を要する儀式文には適用するにたへないと非難してゐた者もあつたのである。ところが、島村さんの弔文はどこまでも莊重であつて、いささかも儀禮を失はずに、しかもよく情意をつくしてゐた。島村さんは實に事實をもつて難する者の蒙を啓いたのである。

而してこれが口語體の弔辭の嚆矢でもあつた。

『二葉亭研究』第六號・昭和十三年四月十六日

金一圓の原稿料

二葉亭さんが『浮雲』を出して日本の小説界に一新紀元を劃したのは明治二十年、ツルゲーネフの『あひびき』や『めぐりあひ』の翻譯を出して、後來の文學者達に大きな影響を與へたのは明治二十一年であつた。尤も、わたしなどはまだほんの子供のころで、さういふ事實は後に明治の文學史や何かで知つたことではあるが、三十四、五、六年の交、わたし達が早稻田に學んでゐたころは、誰も彼れもが氏の譯に成つた『片戀』や『うき草』を讀んでゐないものはないくらいであつた。そして誰も彼れもが其の譯筆に依つてツルゲーネフに感嘆し憧憬し心酔してゐたものである。

ところが、當の二葉亭さんはそのころの文壇には香として消息を絶つてゐた。なんでも、氏の本望としたところの志士となつて、支那かどこかに放浪して、大いに天下の事を劃策してゐたらしかつた。

越えて明治三十八年の、たしか初夏のころだつたやうに覺えてゐる。日露戦役の眞最中である。わたしはその前年に早稻田を出てからずつと京橋の隆文館に勤めてゐた。千葉（龜雄）君と一緒に『活動之日本』と『新聲』といふ二つの雑誌を編輯してゐたのである。その或日のことであつた。社主ともいふべき地位にゐた草村北星氏ががりきつてわたしにかう言ひながら、一通の手紙をつきつけた。

「見たまへ、これを。……一圓なんて弱つてしまふ。」

それは坪内先生のお手紙であつた。二葉亭さんの翻譯の原稿に添へたもので、どうかこれを買つてやつてほしい。原稿料は一枚一圓づつで、といふ意味のことがそこに書かれてあつた。

「一圓なんて拂へやうないぢやないか。」

草村氏はまた繰返した。

「でも、二葉亭さんの翻譯ならば……」

「だつて、一圓は困る。」

『新聲』といふ文學雑誌をやつてゐたのだから、わたしは勿論、草村氏とてもまんざらそれが欲しくない譯でもなかつたのだが、三十何枚もある原稿の一圓づつの原稿料が高過ぎたのである。今日のやうに五、六、七圓は當り前で人に依り場合に依ると十圓も二十圓もするといふ世の中ばかり見てゐる者は、なんの一圓ぼつちの原稿料が、と思ふかも知れないけれども、當時の經濟状態からいふと、新聞に連載した百五十回前後の長篇小説を單行本にするために買取る値段が三十圓くらゐであつたのだから、二葉亭さんの原稿料としては高くはなかつたとしても、本屋のふところ勘定では拂ひきれなかつたのである。

この原稿は後に『新小説』に載つたと思ふが、題を覚えてゐないのが残念である。

が、二葉亭さんほどの人でも、しばらく文壇を離れてゐると、自分の手では原稿を捌くことが出来なかつたらしい當時の事情と、坪内先生が、ずっと若い後進の子弟ばかりでなく、二葉亭さんのやうな方のさういふ面倒までも懇ろに見られたこととは、一圓の原稿料が容易に消化しきれなかつた當時の出版界の事情と共に、わたしの思ひ出の一つとなつてゐる。

—『文藝行動』四月號・大正十五年三月十五日—

『二葉亭全集』第三卷

『二葉亭全集』は、第一卷の創作の卷、第二卷のツルゲエネフの卷に續いて、第三卷にはゴゴリ、ゴリキイ、ガルシン、アンドレーエフの四家の翻譯、すべて十二篇を収めて出版された。

私は凡そ全集といふものには、其の人を問はず、其の種類を問はず、いつも一種ふだんとは違つた敬虔な心持をもつて相對する。されば全集全部を仔細に研究した上で、其の人一代の事業を改めて展開して見ようとするなら格別、其の事業の一部たる一巻二巻の書物を取つてそれを輕々しく批評しようなどとは決して思はない。

殊に二葉亭主人には、その生前わたしはいろいろとお世話になつてゐる。今日その全集を目に見、手に取るごとにいつもしばしばお目にかかつた時の情景が目の前に浮んで来て、今もゐますが如くに、わたしは目をあげて空間に故人の面影を描き出すのである。今になつて考へると、わたしが主人のところへしばしばお訪ねして、いろ／＼お話など伺つた時分は、決して主人の得意な、楽しい時代ではなく、却つて、事志と違つて、心は煩悶、懊惱などといふ言葉によつてこそ表現されるべきであつたやうな時代だつたのだが、不思議にわたしは、いつも快く引見されて、一度も不機嫌な顔は見せられなかつた。坪内先生の前では、いつもひどく窮屈な思ひがして、膝一つくづさなかつた私だつたが、二葉亭さんのところでは、らく／＼と腰を据ゑて、汲めども盡きない慈味のこもつたお話を長々と伺つては歸つて来た。いつもいゝ氣持にインスパイアされて、大いに元氣づけられて、勇氣を胸に振り起しながら。

私は今、故人の前に坐つて其のお話を聞き入つてゐると同じ心持で、黄味が加つたクロオスを南京型に仕立つた全集の第三卷に對してゐる。私は此の第三卷に收められてゐるものの中では、殊に深くガルシンの『四日間』を愛讀した。これが『新小説』に苜心といふ名で載つたのが、忘れもしない日露戦争の始まつたばかりの三十七年の七月、世は一部の非戦論者がやかましく戦争の慘禍を説いてゐた時であつた。作意が戦争の挿話に依つて負傷者の苦痛を描いたものであつたと、匿名であつたことが、奇異なる好奇心を人人の胸に煽つて、作者は一體誰であらうか？ といふ穿鑿から當推量がまちまちであつた。

丁度そのころ、坪内先生の令甥である鋭雄さんが、大石橋で戦死されて、その追悼會が牛込の矢來俱樂部で開かれた。其の席には多くの早稻田の講師も見えてゐた。同窓の一人で私と一緒に長く自炊生活をした男は、一人の講師に向つて、「あれは先生でせう」と祕密を見抜いたやうに話しかけた。其の時私は、其の講

師の思ひも寄らぬといふやうな表情を浮べながら否認したのを覚えてゐる。

私は其の時分、齋藤緑雨の『雨蛙』を読んでゐたので、この『四日間』の精緻な描寫は、作中の人名がロシア人であると共に、どうしてもロシアから來たものでなければならぬ。ロシアから脈を引いてゐるとすれば、作者は二葉亭主人でなければならぬ。かう信じて其の席上で講師と友とに自分だけの想像を話した。二人もそれには、或ひはさうかも知れん位の肯定を與へてゐた。今になつて考へて見れば、ガルシンといふ立派なロシアの作家を知らずにゐたことが哀れに無智であつたことを思はせるけれど、主として英文學を學んでゐた我々に取つて、始めて紹介されたガルシンに對してストレンジヤアであつたことは少しも不思議ではなかつたのである。ただ幾年か文壇に跡を絶つて、杳として消息の聞えなかつた二葉亭主人を探り當てたことに對しては、私は其の時多少の興奮を覺えて、激したやうな口吻で物を言つたことを覚えてゐる。

主人の翻譯はそれから引續いて、陸續と世に公けにされた。此の第三卷に收められてあるガルシンの『露助の妻』も、ゴリキイの『猶太人の浮世』も、『ふさぎの蟲』も、『二狂人』も、『乞食』も、ゴゴリの『むかしの人』も、『狂人日記』も、アンドレーエフの『血笑記』も皆な『四日間』以後のものである。

主人の翻譯を讀む時、私はいつも其の文章に一種の高い聲調のあることを感ずる。それについて、私は三十八年の九月、よく晴れた氣持のいい初秋の日の午後、ある雑誌のために初めて主人を訪問して、其の翻譯の標準を聽いた時のことを思ひ出さずにはゐられない。主人は其の時、元來翻譯の標準のやうなものは、人に依つて自然と異らうから一概に云ふことは出來ないが、自分は今までかういふ方法に依つてやつて來たといつて次ぎのやうに話された。――

一體、歐文は唯だ讀むと何でもないが、よく味つて見ると、自ら一種の音調

があつて、聲を出して讀むとよく抑揚が整うてゐる。即ち音樂的ミュージカルである。だから、讀むのを聞いてゐても中々面白い。實際、文章の意味は默讀した方がよく分るけれど、自分の覺束ない知識で十分に分らぬ所も聲を出して讀むと面白く感ぜられる。これは確かに歐文の一特質である。

所が、日本の文章にはこの調子がない。一體にだら／＼して、默讀するには差支へないが、聲を出して讀むと頗る單調だ。管に抑揚などが明らかでないのみか、元來讀み方が出來てゐないのだから、聲を出して讀むには不適當である。

けれども、苟くも外國文を翻譯しようとするからには、是非共その文調をも移さねばならぬと、これが自分が翻譯をするについて、先づ形の上の標準とした一つであつた。

そこでコンマやピリオドの切り方などを研究すると、早速目に着いたのは、句を重ねて同じことをいふことである。一例を挙げると、マコーレーの文章な

どによくある *in spite of* の如きはそれだ。意味から云へば、二つとか三つとか、もしくは四つとかで十分であるものを、音調の關係からもう一つ言ひ添へるといふことがある。併し意味は既に云ひ盡してあるし、もとより意味の違つたことを書く譯には行かぬから、仕方なしに重複した餘計のことを云ふ。これは言葉の上にもあることで、日本語の「やたらむしやう」などはその一例である。或ひは「強く厳しく彼を責めた」とか、「優しく角立たぬやうに説得した」とか云ふ類は、しばしば歐文に見る同一例である。これらは凡て文章の意味を明かにする以外、音調の關係からして、副詞を入れたいから入れたり、二つで十分に足りてゐる形容詞をも一つ加へて三つとしたりするのである。コンマの切り方なども、單に意味の上から切るばかりでなく、文調の關係から切る場合が少くない。

されば、外國文を翻譯する場合に、意味ばかりを考へて、これに重きを置く

と原文をこはす虞がある。須らく原文の音調を呑み込んで、それを移すやうにせねばならぬと、かう自分は信じたので、コンマ、ピリオドの一つをも濫りに棄てず、原文にコンマが三つ、ピリオドが一つあれば、譯文にもピリオドが一つ、コンマが三つといふ風にして原文の調子に移さうとした。殊に翻譯を始めた頃は、語數も原文と同じくし、形をも崩すことなく、偏へに原文の音調を移すを目的として、形の上に大變苦勞をした……

所がこの方法で出来上つた譯文を見ると、我ながら讀みづらい、ぎくしやくし、いかにも佻偏聲牙だ、と主人は自分を貶しておいて、さて世間のこれに對する其難や賞讃の聲も高かつたが、それらはみんなこちらの心持を呑み込んだ上での批評でないから、自分に取つては何の役にも立たなかつた。自分は全く毀譽褒貶以外に超然として、いはば獨り角力を取つてゐたのである。それは別に自分に信

ずる所があつたからだといつて、かういはれてゐる。――

元來、文章の形は自ら其の人の詩想に依つて異なるので、ツルゲーネフにはツルゲーネフの文體があり、トルストイにはトルストイの文體がある。其他凡そ一家をなせる者には各獨得の文體がある。この事は日本でも支那でも同じことで、文體は其の人の詩想と密接の關係を有し、文體は各自に異つてゐる。従つてこれを翻譯するに方つても、或一種の文體をもつて何人にも當て嵌める譯には行かぬ。ツルゲーネフはツルゲーネフ、ゴルキーはゴルキーと、各別に其の詩想を會得して、嚴しく云へば、行住坐臥、心身を原作者の儘にして、忠實に其の詩想を移す位でなければならぬ。是れ實に翻譯における根本的必要條件である。

かくして主人は、根本的條件たる詩想の同化に力めると共に、原作者各個獨得の文調を移すを以て、その翻譯の標準とされたといつた。その翻譯文に高い聲調のあるのは決して偶然でない。皆な是れ主人が苦心の結果に外ならぬのである。一般にまだ文章の重んぜられた時代であつたからではあるが、主人が特にこの聲調の高い文章にロシアの名作を移したことは、いかに單調な日本の文章の上に大きな影響を與へて、これを複雑にし豊富にしたか知れない。さういふ點から見ても、主人の翻譯は明治文壇の上に最も大きな光輝を放つたものであつたと云へる。

私は、私のやうな後進の者が、故人に對する追憶のために、茲に故人の全集の第三卷の出版されたことを紹介し得たことを光榮とする。

—『文章世界』・明治四十三年頃—

島村抱月氏

—自己解放の第一人—

島村先生が亡くなられた。それが本當だと知つた時に、わたしはぎよつとしました。俄に左の胸がきりきりと痛んで來たので、わたしはそつと手を懐ろに入れて其處を抑へたりさすつたりしてゐました。暫くは口も利けませんでした。思ひがけない事はするぶん世間に澤山ありますが、こんな思ひがけないことはわたしには今までありませんでした。わたしは肉身の死にも、しばしば出會つてゐますし、先輩や友人の不幸にも度々出會つてゐます。しかし、今度のやうなショックを受けたことはありませんでした。悲みといふ點からいへば、わたしは自分の

子供を亡くした時の方が遙かに／＼辛かった。困つたことが出来たといふ點からいへば、親友の細君が亡くなつた時の方が遙かに強かつた。しかし大變なことが出来たといふ氣がしたのは、大きな樹が俄に倒れたといふ氣がしたのは、今度が始めてです。死はいつ誰の身の上に来るかも知れない。そんな事は百も承知でゐながら、今度の死は有り得ることではないやうに暫くの間は思ひました。

先生の事に就いては何かどつさり書くことがあるやうな氣がしますが、どうしてか唯今の所、とんと纏まりがつきません。しかし、一つだけ思ひ出すままに書いておきます。それは藝術座の出来た時の事です。

あの時のいきさつはわたし達に取つて恐ろしい試煉でした。なぜといへば、あのいきさつには、わたし達に取つて、少くともわたし自身に取つて、島村先生よりもつと／＼、遙かにより以上の恩師である坪内先生が關係して居られたからです。わたし達は、其の頃政治界にはやつた言葉に依つて、憲政擁護派だとか、清

風亭に集つてゐたが故に、清風亭組だとかと世間から言ひ做されて、本當はそんな筈ではなかつたのですが、世間からは血で血を洗ふ早稲田文壇のお家騒動の渦の中でどたばたしてゐるやうに見られてゐました。しかし、わたし達は何のため憲政擁護をするのであるか。わたしは學校で先生の教へを受けたことは僅か半年足らずでしたし、個人的にもそれまではさう接近してゐたといふ方でもありませんでした。先生のお宅で度々開かれた文藝會のやうなものにも一度も出席したことはありませんでした。それ故、ふとした所縁と、一つは聰明でない青年の客氣に逸つて、あの渦の中に捲き込まれましたが、この何のための擁護であるかだけは明かにしておきたかつたのでした。それには島村先生のこの旗擧げを坪内先生がどう見られてゐるか。文藝協會の島村先生に對する所置は事實不穩當なのか。さういふ事の真相を知りたい要求を心の中に覺えました。そしてこれは、獨りわたしばかりではなく、他の諸君もすべて同斷であつたことと信じます。

其の結果、わたし達は、相馬、片上、中村の諸君とわたしとは、所謂清風亭組の委員に選ばれて、當時文藝協會の理事であつた金子先生から、坪内先生のお心持や、島村先生對文藝協會の關係やを伺ふことになりました。其の會見は學校の恩賜館で行はれました。其處でわたし達は金子先生と、それから特に委員の諸君に會はうといはれて同席された當時の學長高田早苗先生とから、一切の事情を巨細に涉つて物語られました。初めは高田先生の「政治家」が我々を籠蓋するのだといふ風に多少の用心を以て向つてゐましたが、其のうちに先生の誠實が次第にわたし達の頑なを和らげました。その時の先生は決して政治家ではありませんでした。先生は我々に對して本當の愛を以て向はれました。坪内先生の、及び高田先生の、島村先生に對する愛の心づくしを物語られた時にわたし達は涙ぐんでゐました。本當に、本當にしみじみとした會見でした。……しかし、その時の事の委細を茲に述べる事は出来ません。また其の必要も今はありません。……

が……

兎に角、わたし達はこの會見の結果、最初の意氣込をだいぶ挫かれたことは事實です。第一、清風亭にわれ／＼の報告を待つてゐられる他の諸君に對してどう報告していいかにさへ迷つた位です。しかし其の代り、わたし達は涙の感激を以て一ぱいに胸を充たされてゐました。殊に其の際高田先生の言はれた、「だが、もう事がかうなつた以上は今更どうすることも出来ない。島村に其の所信を行はせて、劇壇に光榮ある事業を完成させる外はない。君等は何處までも島村を後援してくれ。あの男には根に弱い淋しい一面があるから、周圍からでも賑かにしてやらないといけない。坪内君の意志も無論そこにあるのだから、」といふお言葉が、わたし達に固い決心をさせました。かくして所謂青年早稻田黨は結束して立ちました。そして藝術座はあの華々しい旗擧げをいたしました。

しかし、茲で忘れてならぬのは、あの時の島村先生の決心です。先生のあの時

の胸中には、恐らく恩師に背かねばならぬといふ事情に對して手痛い悩みを持つてゐたことと思ひます。而かも、それにも拘らず、敢然と武者ぶるひに身を委せなければならぬ内心の要求は更に一層強かつたのでありませう。よしんばあの時、先生の胸の中に力強く芽を吹きかけてゐた「戀」に導かれたからにもせよ、一切の因襲から自己を解放しようとしたあの武者振は痛ましくも勇ましかつたといはなければなりません。あの先生の決死の覺悟が我々後進のなまくらな心にどんなに強い影響を與へたか……

然るに今にして猶ほ且つ、先生が自然主義を唱道したのを一期の不覺であつたやうにいふ人もありますが、事實に於いて自己を立てた先生に對して、さういふ言説はあまりに沒理解な同情であると思ひます。従つてわたしは先生をして、最後まで文藝批評家として立たせた方が、といふやうな諸賢の説にも容易には頷くことが出来ません。いかにも先生の資質としては、あの興業師めいた事は不適當

であつたかも知れません。しかし誰か自分の本當の運命を知つて居りませう。わたしは先生が所信を斷行して、生涯をそれに依つて貫かれたことを讚歎します。恐らくは先生御自身にも、先生が眞實の子であつた藝術座あの淋しい一室で、新劇壇の元勳として逝かれたことを本望としたであらうと思ひます。

茅ヶ崎に於ける國木田獨歩

明治四十一年二月三日。獨歩さんは大久保の寓居を去つて、宿痾を養ふために茅ヶ崎の南湖院へ行つた。

朝、『渚』の續篇のことで出かけにお宅へ寄ると、氏はもう床の上に起きてゐられた。十時何分か汽車で立つのだとのことで車の支度も出来てゐた。やがて吉江君の細君が見えた。氏はお別れだからといつて、吾々に葡萄酒を注いで呉れた。そして吉江君の細君に、「奥さん、これがお別れになるかも知れないから、よく覚えてゐて下さいよ」と言つた。細君は返辭に困つたやうに何か口の中で言つてゐた。

二月九日。獨歩さんからはがきが來た。――

拜啓渚が遂に出來ないでさぞかし御迷惑なりしならんと恐縮の至りに御座候
田山兄にも宜しくおわび被下度候
愈々去四日より茅ヶ崎の一病室にて極めて鬱憂なる極めて寂寞なる生活を致
す事と相成り候

二月一日の太陽をお送り被下度く願候尙ほ面白き書何でもよろしくお送り願
候

二月八日

二月十三日。國木田からはがきが來たといつて、田山さんから示された。その
はがきにはかうあつた。――

お手紙難有存候。入院後病狀異状なく却て激しき下痢症にかかり衰弱の上に更に衰弱致し呼吸切迫五體縮の如く實に吾ながら淺ましき有様と相成り申候。但し時々は元氣宜しく候間雜誌や書籍をひねくり居候。生死の問題はひし／＼と胸を壓して襲ひ來り、今日までになき心の經驗を踏みつゝ日夜を送り居候。御來話願候。

二月十二日午後認む

二月十六日。獨歩さんを見舞に初めて吉江君と一緒に茅ヶ崎へ行く。空は一面に濃い灰色に鎖されて非常に寒い日であつた。途中から雪さへちら／＼降り出した。汽車は十時前に茅ヶ崎に着いたが、初めての土地ととんと方角が分らない。停車場前の菓子屋で道を訊いて、踏切を通つて海岸の方へ向つた。強い風が眞甲から吹いて來て幾度か吹き倒されさうになつた。後で聞くと、一體茅ヶ崎は風の

強いので有名な所で、殊に其の日はひどかつたのださうだ。

やつと病院へは着いたが、不知案内のこととて迷つて裏の松原から第二病室へ行つた。そこから病院の人に案内されて第三病室の裏手に辿り着いたが、風が強くて、ドアを開けることも中々出来なかつた。

獨歩さんは元氣がよかつた。

「昨日來ればよかつた。天氣もよかつたのに。」と氏は言つたが、すぐに調子をかへて笑ひながら、「併しかういふ日もいゝさ。今に獨歩を訪ふ記を作る時に、『風寒き日なりき』なんて書けるから。」

吾々は先づ何よりもといふので、火燧に當つた。そして寢臺の上の獨歩さんと、其の後の大久保の話などを始めた。

やがて文學談になつた。

「今の小説はあまり面白く無さ過ぎる。」と獨歩さんは言つた。「まるで地べたを

引きずつて歩いて、さあ見ろさあ見ろといはれるやうな気がする。ちつとは地べたを離れて、三四尺高い所から見せて呉れるやうにしたらよからう。かう地べたを引きずられては苦しくてたまらない。」

獨歩さんがふだん小説家といはずに、詩人々々といつてゐるのも、世間から自然主義者を以て目されるのに満足しなかつたのも、みんなかういふ考を抱いてゐるからだといふことを、僕等は後で話し合つた。

話は次第に進んで遂に代作論に移つた。

「それであつてさへ、一般から文學の價値が認められてゐない時代に、代作をしたり代作をさせたりして自分から墮落して行くとは何事だ！」と氏は其の嘆れかかつた聲を勵まして言つた。「吾々まじめに筆を執つてゐるもの目から見れば實に心外でたまらない。僕だとか田山だとかいふものにはちよつとでもそんなことは出來ん。〇〇だの〇〇だのやうな態度は自ら自己の價値を下げるものだ。決

して世間をして文壇を重んぜしむる所以ではない。逢つたらよくさう言つて聞かせてやりたい。」

それから毎日見舞客の盛んに來ることの話になつた。

「昨日も草村が來て、見舞にカステラを持つて來たはいいが、俺が食ふつもりで持つて來たんだから開け、といつて、あらかた一人で平らげてしまつた。」と氏は大笑ひをして、「それでなければ新聞か雑誌の種取りだから、うつかりしたことはしやべれんで困る。今日は然し君等が來て呉れて嬉しかつた。」

かう云ひながら獨歩さんは寢臺から降りて、僕等と一緒に火燵に當つた。

僕等は病室にはひつてから我慢して煙草を慎んでゐたが、いよゝ我慢が出來なくなつたので、吸つてもいいかと訊いた。

「いけないんだけど……。僕も喫みたくてしやうがないんだ。」

なんでも其の前の日、鹿島櫻巷氏が見えた時に、大和か何か置いて行かれたの

が状差にあるのだが、後の樂みだといつて、細君が中々吸はせないやうにせられた。で、吾々の持つてゐたのに、吾々と一緒に火をつけて吸ひ始めたが、廊下に足音がすると、もしや醫者ではないかと笑ひながらそれを火燧の中に隠された。煙が薄く天井の方へ昇つて行くのを目で追ひながら、吾々もまた其の度毎に火燧の中へ隠した。

病院の食堂で晝飯を食べてから、吉江君と二人で構内を海岸の方へ散歩に出た。相變らず風がひどくて立つてはゐられない位であつた。其の中で、二人はとある砂丘の蔭にしゃがんで、袖屏風をして、辛うじて巻煙草に火をつけたが、煙草は見る間に片側をめぐりと火が走つて、吸つても何の味もなかつた。

この日は茅ヶ崎の荒涼たる方面を極端に發揮した日であつた。

二人が病院に歸つて見ると、もう歸るべき汽車の時間が迫つてゐた。で、すぐにお暇した。

三月二十二日。獨歩さんからはがきが來た。——大久保も春めいたらう。近頃は如何。龍土會の模様を知らせ——といふやうなことが書いてあつた。獨歩さんへ長い手紙を書いた。

三月三十日。夕方、吉江君の所へ行く。菩提堂の持つて來た本と、片上君の返した本とを取りにである。吉江君は未だ茅ヶ崎から歸つてゐなかつた。細君が白い顔を夕暮の窓に浮き出させて、淋しさうに外を見てゐた。

「もう歸りませうから、お待ちなすつては？」

細君はかう言つて格子戸の鍵を外した。

僕は歸るまで待つことにして上り込んだ。そして其處にあつた『有明集』や『村の人』やを讀んでゐた。

やがて吉江君は歸つて來た。獨歩さんの病氣は別に變りはないが、精力はだいぶ衰へたといふことであつた。併し體量は少し増したさうだ。

四月二十六日。やつと『文章世界』の増刊の『近代三十六文豪』の原稿が一通り揃つたので、漸く病篤しといふ獨歩さんの所へ吉江君と一緒に行く。

植木屋へ寄つて、獨歩さんの内の人から吉江君が註文された山椒の木を四五本と、大久保の春をといふ心で、櫻の枝を三本切らしたのを買つた。それから京橋の竹葉へまはつて、土産にする鰻の蒲焼を作らせた。

午前中は晴れてゐたが、午後は薄曇りで風が底冷たかつた。竹葉で手間が取れたので、豫定の汽車には乗れなかつた。此處でぼんやり待つてゐるよりもいふので、其の時出ようとしてゐた午後二時の横須賀行に乗つた。

先達ての大雪で、摧けたり折れたり倒れたりした電柱が、田の中に右往左往に

算を亂してゐた。そしてそのまた電線が、さながら機の經絲のやうにどこまでもどこまでもと遠く曳いて田の中を這つてゐた。

此の日は途すがら無闇に墓が目についた。鶴見であつたかと思ふ。停車場のさきの線路に沿つた所に墓場があつて、その傍に百姓がせつせと仕事をしてゐた。壘々と小さな石を刻んだ墓が直ぐ目の前に並んでゐるのが、彼等の目にはどういふ風に映るであらうか？ どうせ死に行く人の身ではあるけれども、今日の前にある墓石の下には、先に世に在つた幾百千の人が埋つてゐるといふことに思ひ到つたならば、彼等はこれをどう考へるであらうか？

僕はその事を吉江君に話した。すると話は自然と人間との交渉から人生と藝術との關係に移つた。そして二人は、それらのことについても、もはや先輩の言説以外に出でなければ満足されぬやうになつたといふことを話し合つた。

大船では東海道行の列車が來るまで十五分ばかり間があつた。二人は停車場を

出て、朽ちて危げな橋を渡つて淋しい村にはひつた。菜の花の咲き満ちた田圃をぶらぶらと歩いてから、別の橋——三尺位の幅で四尺位も高い欄干のついた珍しい橋を渡つて線路の方へ歸つて來た。と、其處に驛夫が風を揚げようとしてゐた。けれども、糸目の附け方が下向きになり過ぎてゐたので、非常に強い風であつたにもかゝらず、どうしても揚らなかつた。

その風で思ひついたやうに吉江君が話し出した。——もう何年か前、初めて中學にはひつた年のことであつた。非常に大きな風を大勢かかつて、ある河原で揚げようとしてゐた。けれども、風の工合が悪くてどうも旨く行かなかつた。で揚げてはおろし揚げてはおろししたので、その太い糸は河原にたぐられたまま、方に渦を巻いてゐた。そのうちに向きのいい風が強くと吹いて來たので、それツといふ間に、風は勢ひよくぐんぐん揚つて行つた。風が強いたので糸を持つてゐるこゝとが出来ない。と見ると、中空高く、一人の男がその糸の渦の中にあつたものと

見えて、片足を引き巻かれたまゝ逆さに引き上げられてゐる。一同のものは驚いて、一生懸命に糸を手繰つたが、どうしても風の力に勝てなかつた。男の身體は空中で上つたり下つたりしてゐたが、暫くして風の力が衰へた時、どさりと下に轉び落ちた。が、其の時はもう全身血だらけになつてゐた。その男は中學の二年生であつた。

吉江君が話し終つた時に、二人はブリツヂを渡つて、近づいて來る下り列車をプラットフォームに待つ人になつてゐた。

茅ヶ崎の停車場からは、まともな砂ツ風を吹きつけられながら、急ぎ足で歩いて行つた。

病院へ着いた。二人は急いで廊下の行き止りまで行つて立ちどまつた。

「御免下さい。」と吉江君がドアの外から聲をかけた。

「おはひりなさい。」とおきみさんの聲が答へた。

ドアを明けて二人ははひつた。

見ると、獨歩さんは廊下の方を頭にして寝てゐたが、僕等がはひつて行つても振り向かうともしなかつた。

二人は疊の敷いてある方に進みながら、獨歩さんの顔を見て黙つてお辭儀をした。

「君等は、」と獨歩さんは言ひかけて、フウ／＼と深く力のない呼吸を暫く續けてゐた。「いゝ所へ來た……」

言葉ははたと絶えて、室内にはただフウ／＼といふ苦しげな呼吸の音が聞えるばかりであつた。

「今まで、」と獨歩さんは暫くしてからまた言ひかけたが、すぐに聲をとぎらして、また力のない呼吸を續けてゐた。「僕は七顛八倒の苦しみをしてゐた。」

かう言ひ終つた時には、身も心もがっかりしたやうに見えた。

顔は一種悽愴な色を帯びてゐた。——底にやゝ黒味をもつて表には青味があつた。目は、あの懐しい表情を失つて、瞳は据わつたまゝ動かなかつた。

僕等は何と挨拶してよいか分らなかつたので、黙つて氏の顔を見てゐた。座に一人の先客があつた。年の若い男であつた。

「この君は」と獨歩さんはその人の方にいくらか顔を向けるやうにして、「その苦しむ所をすつかり見たんだ。」と言つたが、暫く呼吸を入れてからまた言葉をついだ。「いつそ君等にも見せればよかつたなあ！ 僕がどんなに苦しんでゐるか見て置かせたかつた。」

でも持つて行つた櫻の花は、先づ氏を喜ばせた。鰻は更に氏を喜ばせた。

「この頃は鰻にだいぶ縁がある。この間は岩野と蒲原とで送つて呉れた。小包で來たんだから、もし中るといけないと思つて、まづ女どもに毒味をさせたが、別段の變りもないらしいので、また、あたたためて貰つて食べたが旨かつた。」

僕はこの時、漠然と石田三成の故事を思ひ起した。

「今さら愚痴をこぼすでもないが、」と獨歩さんは沈痛な聲をして、「何だつてこんな肺病などに罹つたのだらう！」

獨歩さんの口から肺病といふ言葉を僕等が聞いたのはこれが初めてであつた。

「君！」と、獨歩さんは先客を呼びかけて、「肺病は、死ぬ時どんな風に死ぬものだい！」

その人は返辭に窮したらしく、薄笑ひをしてばかりゐた。

「君は前期だけでも取つたといふから知つてるだらう。え、苦しい死に方をするものかい？」

それでもその人は返辭をしなかつた。實際この場合には誰だつて返辭に窮するであらう。

「僕は今死んでも紅葉さんより一年長生きする譯だ、」と氏は言ひ出した。「三

十八だから。紅葉さんは三十七だつた。あゝ綱島君が羨ましい　まるでかう、枯木のやうに、全身朽ち果てて、枯木のやうになつて、ボキリといつたといふから。……僕にはまだ幾らか元氣がある、氣力がある。さぞ死ぬ時苦しむだらうな！」
一座はしんとして暫く經つた。

「吉江君、前田君、もうこれきり、また君等が来るまで生きてるかどうか分からぬから、よく見ておいて呉れ給へ。これが最後かも知れない。」

かう言ひ終ると、暫く咳き入つた。苦しさうで僕は思はず面をそむけた。

「吉江君！」と不意に力のない尻のかすれた聲で呼んだ。

「は」と吉江君が答へた。

獨歩さんはせい／＼呼吸をしてゐて、いつまでも言葉を續けることが出来なかつた。

「この頃は續けて物の言へぬ時がたび／＼あるんですよ、」とおきみさんが取り

なすやうに言つた。

獨歩さんはなほ暫くの間せい／＼息を切らしてゐたが、やがて言つた――

「別に何も用はなかつたのだ。たゞ『吉江君!』と呼んで見たいので呼んで見たんだ。」

一座は沈黙のうちに無限の感慨に打たれた。

「前田君!」とまた同じやうな調子で呼んだ。

「は、」と僕は返辭をした。

しばらくまた沈黙の時間が續いた。

「ねえ君、もう黒枠の寫眞と略傳でも用意して置きたまへよ。」

あゝ何といふいたましい言葉であらう! 僕は今かう書きながらさへ、あの「吉江君!」と呼んだ聲、「前田君!」と呼んだ聲が耳について、其の人の前にゐるやうな氣持がする。

「けれども、死んでも黒枠の廣告と黒枠の寫眞は出されたくない。花枠か何かで綺麗にして貰ひたいなあ!」

暫くしてから氏はまた言葉を續けた――

「今僕が死ぬと、世間の奴は『獨歩はいゝ時に死んだ。これから先き生きてゐたつて、どうせ何事も仕出來しはせまい』などといふだらうが、僕は今は死にたくない。これからだと確に信ずる所がある。僕はこれから、全く從來の作風と異つたものを出して見たい。一般の作より三四尺高い所を行くやうなものを出して見たい。今までのものはただ僕の技巧の力を示したに止まる。これから本當の作に取りかゝるのだが、あゝ、駄目だ!」と氏は溜息をついて、「天もし我に十年の歲月を假せば、と願ふけれど駄目だ! あゝ!」

暫く間を置いてまた言葉を續けた。――

「僕は今『砂丘』と題するものを、いつでも書けるやうに頭の中で作つてゐる。」

冒頭の句はもう出来てゐる。かういふんだ。『南の空は青々と晴れて、穏かな春の光は陸にも海にも充ちてゐる。』何の細工もせず、シムブルで印象を明かに書きたいと思ふ。『砂丘』の作意はシムボリックだ。……」

かういつて氏は其の筋を語られた。――

茅ヶ崎の海岸は砂丘を以て有名である。この砂丘は風の工合、波の工合に依つて、断えずその位置を變へる。暖い日など、病院の患者は、その砂丘の上に出て、穏かな日光を浴びながら清らかな海の空気を吸つてゐる。その中に妙齡の少女があつて、自分と懇意になる。その少女は十二の年から病院に来て、そこで少女になつたので、自分のことを兄さんと言つてゐる。ある日、海氣室の窓に凭つて砂丘のあたりへ打ち寄せる波の姿を見てゐると、不意にその少女が傍へ寄つて来て、「ねえ兄さん、私達はなぜ生きてゐなければならんでせう？ 死んだつていいぢやありませんか」と云ふ。それから色々のことがあつて、結末は、一夜凄

じい大暴風雨があつて、翌日見ると砂丘は跡方もなくなつてゐるといふので局を結ぶ。病院長をゴッド、砂丘を人生、患者を人間に喩へてシムボリックの意味を持たせるのである。その少女は實際南湖院にゐる少女をモデルに取つたのだ。

それから話は轉じて一般の小説の批評になつた。

「ねえ君、この頃の小説はつまらないネ。まるでかう藥を飲まされてゐるやうなものだ。少しも旨味といふものがない。楽しませて呉れない。……その極端が島崎君の『春』と田山君の『生』だ。『生』はまだそれほどでもないが、『春』は實にひどい。小栗君の『ぐうたら女』をみんな褒めるが何處が旨いんだらう。徳田君の『二老婆』も實によく書いてあるが、沈鬱で讀むに堪へない。聞くに堪へない。我々はもつと面白いものを欲する。」と傍にあつた蒲焼を指して、「この鰻のやうに旨くて、そして身體のためになるやうなものを欲する。僕の作など、『獨歩集』以來、みんなとにかく多少の面白味はあると思ふ。」

それから自然と人間との交渉についても、その考を話された。

先客は『新聲』の村田といふ人であつた。

七時の汽車で一緒に歸ることになつて、お暇をして三人は廊下へ出た。

と、送つて來た細君が、廊下の中程まで來ると、いきなり吉江君の手に縋つて、

「吉江さん、大變よ！」とばかり、涙をはら／＼とこぼした。

獨歩さんの左肺は疾うに形なしになつて、今は右肺のみが僅に其の一部を残してゐるばかりだから、いつ變があるかも知れないと院長が言つたのだといふ。これまで訊かう訊かうと思つたが、何だか怖くて訊かなかつたが、昨夜訊いたらさういはれたといふのであつた。

五月二日。午後二時過ぎ田山さんが茅ヶ崎から歸つて來て、國木田さんの工合が少しいゝやうだと話された。どうせ癒らぬ病氣ではあるが、せめては樂に日の

過されるといふのを嬉しく思ふ。

五月五日。十時。もう寝ようかと思つてゐた所へ吉江君が來た。今日茅ヶ崎へ行つて來たが、どうも良くないやうだと、其の病狀を語つて聞かせた。

五月二十三日。午後三時四十分の汽車で、新橋から茅ヶ崎へ向ふ。田山さんと吉江君と三人。新橋停車場前の水菓子屋で土産を買つて行く。

どうせ今夜は遅くならうから、何處かへ泊らなければならぬが、あの砂の茅ヶ崎へ泊るのはいかにしてもいやだ。江の島か、國府津か、何所かへ行かうと三人は汽車の中でいろ／＼相談した。が、時間の都合で、とても江の島へは行けさうにもない。藤澤、鎌倉と後戻りをするよりも、いつそ國府津へ行くことにしようではないかと田山さんが言ひ出して、吉江君も僕も賛成した。

病院に着くと、獨歩さんが、今まで茅ヶ崎館の連中が来てゐたが、田山君も吉江君も来ないので、もう今日は来まいと云つて、今引揚げたばかりだといふ。

「小栗が寫眞を撮れと頻りに勧めるんだが、田山が来ねば役者が揃はんからと云つて斷つた。君が来たから、もう田舎の寫眞屋でもかまはん。明日撮ることにしよう。」

獨歩さんはかう言つて田山さんの見えたことを非常に喜んだ。そして、茅ヶ崎館の連中の噂をしたり、其の諸君からよこしたのだといふはがきを見せたりした。

獨歩さんは吾々が國府津へ行くつもりだといふのを聞いて、是非茅ヶ崎館へ行くと頻りに勧めた。其處に大勢来てゐるのに、強ひて餘所へ行くことはないといふのである。けれども、其處に大勢来てゐるので、悪くすると、一晩眠られぬことがないとも限らぬといふ懸念は、一層強く僕の心を國府津の方へ持つて行つた。

國府津館であのどうつといふ波の音を聞くことは、この砂の茅ヶ崎で一夜を安眠も出来ずに明かすよりどんなに快いか知れない！ 僕の心はどうしてもその方に多く惹き付けられた。

七時に、ともかくもといふので、病院を辭して外へ出た。

田山さんは、獨歩もああいふんだから、茅ヶ崎館へ行かうかといふ。吉江君も行つてもよいといふ。けれども僕はどうしてもいやだつた。二人が行くなら、僕一人だけでも何處か他へ行つてよく眠つて來ると言つて、我を張つた。來る時汽車の中であれほどに極めて置きながら、行けば十中九まで飲み明かすことになりさうな中へはひつて行くことはないと云つて、豫定の計畫を實行することを主張した。

病院を出てから保造館のさきの方まで、暮れかゝつた道を、行く泊ると互ひに言ひ張りながら歩いて行つたが、とう／＼二人も僕の我を許してくれて、國府津

館へ行くことにきまつた。

で、停車場の方へ向つて行くと、途の半ば位の所で、向うから車が二臺、狭い道を勢ひよく駆けて來るのに逢つた。吾々は道端の芝生の上に登つて避けた。

と、

「前田君ぢやないか？」といふ聲。

「吉江君か？」といふ聲。

見ると、車を留めたのは正宗君と岩野君とであつた。

「何處へ行く？ 歸るのか？」

「いゝや、……國府津へ行つて泊らうといふんだ。」

「なぜ茅ヶ崎館に泊らないのだ？」と岩野君が詰るやうに訊く。

「連中が大勢ゐるから眠れまいと思つて……」と田山さんが言ひかけると、

「連中つて、誰だ？」と正宗君が早口に訊く。

「小栗、眞山、小杉、中……」

「それやア駄目だ。とても寝られやあしない。」と正宗君は言つて、「僕達も國府津へ行かう。」

「う、行かう。」と岩野君も同意した。

「ぢやあ停車場で待つてゐるから、すぐ引返して來たまへ。」

右と左に別れて吾々は停車場へ行つて待つてゐた。二人は幾らも經たぬ間にやつて來たが、生憎汽車の出た後だつたので、暫く待たねばならなかつた。

待合室に空しくぼかんとしてゐるでもあるまい。腹もすいて來たし、といふので、停車場前の茶店に寄つてビールやサイダーを抜かせた。正宗君は近所の菓子屋から饅頭を買つて來た。

この茶店に妙な風俗の女が二人ゐて、頻りに小栗さんや眞山君の噂をしてゐた。「あの頭の禿げた方が先生でしょ。さうしたら、あの方にまた先生があるんです

つて。その先生が東京からいらつしたのですよ。ですから先生の先生ですから、大先生ですわねえ！

女どもはこんなことを面白さうにしやべりながらよく笑つた。

國府津館へ着いたのは十時半。

海に近い下座敷の兩戸を明け放さして、心ゆくばかり海の香を吸つた。

浴。食。十二時に近く寢床に入つた。

五月二十四日。朝。起きると浴衣の上に羽織を引つけて、海岸を一人で歩いた。食後、吉江君と二人でまた歩いた。

電話を東京の博文館寫眞製版所にかけて、齋藤紫白君に茅ヶ崎へ来て貰ふことにしてから、九時四十分の汽車で茅ヶ崎へ向つた。

停車場で紫白君の十分遅く着く下りで来るのを待つて、六人連れで南湖院へ行

つた。

茅ヶ崎館の諸君は既に來てゐた。すぐに寫眞を撮ることにする。

「先づ位置を選定したまへ。」と獨歩さんは寢臺の上からみんなの方を見ながら言つた。

「外へ出て風に當つてはいけまい。」と誰か氣遣つて言つた。

「なあに大丈夫だ。君等がみんな並んで、すつかり準備が整つてから僕がおぶさつて行けばいい。」

そこで第三病室の玄關先で、獨歩さんをまん中に、田山さん、小栗さん、正宗君、中村君、相馬君、小杉君、岩野君、眞山君、吉江君、僕、それから附添の看護婦の十一人がぐるりとまはりを取りまいて寫した。

この集合の撮影が済んでしまふと、田山さんが不意に思ひ付いたやうに獨歩さんに言つた――

「君一人撮つてはどうだ？」

「撮らう。」と獨歩さんは快くうなづいた。

みんながまはりを退いてしまつた後に、一人で階段に腰をかけてゐるのを見ると、こんなにも瘦せてしまつたかと痛ましかつた。見てゐるのも危なさうで、はつといふ間に轉びはしないかとほらくした。

「かうしてゐると、まるで佛さまのやうだなあ！」と、獨歩さんは微笑しながら頬を撫でた。

撮つてしまふと、またおきみさんにおおはれて、今度は外を廻つて病室の裏口のドアの方から歸られた。

茅ヶ崎館の諸君は一時幾分か汽車で歸るからと言つて、茅ヶ崎館へ引き上げた。

「みんな一緒に歸つてしまつては淋しいから、君らはもつとゐて呉れたまへ。」

かう獨歩さんがいはれるので、吾々は三時五十分の汽車で歸ることにした。そして晝飯を食べに、さきの諸君の後から濱邊を通つて茅ヶ崎館へ行つた。

午飯後、病院に来て見ると、田村三治氏や戸川秋骨氏が来てゐた。所へまた中桐確太郎氏が見えた。氏は二三日の内に清國へ立たれるので、暇乞かた／＼見舞に見えたのださうだ。

停車場へ來ると、中澤臨川君に逢つた。汽車を待つてゐるうちに中桐さんも歸つて來られた。

岩野君と正宗君とは二等、吾々は三等で歸つた。

六月二十四日、昨日の午後八時四十分、獨歩さんは遂に歸らぬ人となつた。最後に逢つた五月二十三日の夕方、僕が茅ヶ崎館へはどうしても行かぬと強情を張つてドアを出た時、後から宥めるやうに、「前田君、そんなことをいはんで今夜は

行きたまへよ」と言つた聲音はまだ耳に残つてゐる。僕はその言葉に背いた言譯もまだしなかつたのに、あゝ！ またと逢へない人となつてしまつたのか。

（茅ヶ崎に病を養つてゐた時の獨歩と、その時その周圍に集まつた知己朋友その他の人々との状態を、もし有りのまゝに書き得たならば、四十一年、自然派勃興時代の文壇の一部の空氣は、或ひはそれに依つて窺はれはしないかと思つて、初めはその方面の材料の蒐集に取りかゝつて見たが、時日のなかつたために、遺憾ながらそれが思ふやうにまとまらなかつた。止むを得ず、當時の自分の日記を抄録して、晩年の獨歩を偲ぶと共に、自己省察の資料の一端とする。）

—『文章世界』金風號・大正元年十月—

中澤臨川氏の思ひ出

昨日、中澤臨川氏の告別式にお宅へ行つた歸りに、荻窪の停車場で電車を待つてゐた時、一緒に落ち合つた人人の間に、中澤君の生前の事がいろいろと語り交された。其の時わたしは岡村（千秋）君から、中澤君が吉江（孤雁）君のフランスから歸つて來られるのを大變待つてゐられたといふ話を聞いて、ひどく心を打たれた。

中澤君は到底再び起つことの出來さうにない今度の病氣を自覺されて以來、何事も諦めが先きに立ち申候」といふ風に、手紙などにも書かれてゐたが、吉江君が歸るまで生きてゐられようか、とそれをばひどく心残りのやうにいはれてゐた

さうである。

吉江君がフランスへ行つてから、もう彼は四年になる。幾度か、歸るさうだ、歸るさうだといふ噂が立つたが、今度こそいよいよ歸ることが本當になつて、七月二十二日にマルセイユから丹波丸に乗つたといふ知らせを、わたしはこの數日前、吉江君の細君の方から知らされてゐた。して見れば今頃はもう、スエズから紅海を抜けて、印度洋の方へ出て來た頃である。吉江君は何にも知らずに航海をして來るのであらうか？ 何處ではじめて中澤君の訃報を聞いて驚かれるであらうか？

中澤君と吉江君との友情は、郷國を同じうし、中學を同じうした關係からでもあつたらうが、かなり早くから結ばれてゐた。そして、爾來、精神的には勿論、時には物質的にも、いろいろな深い關係からいよいよ強くされて、長い間互ひに相依り相信じて、常に、いささかもたるむやうなことのなかつたのをわたしは知

つてゐる。吉江君がフランスへ遊學されることになつた時に、心から最も深くそれを喜ばれた友人の隨一人は、恐らくは中澤君であつたであらうと共に、今度、吉江君が歸朝されるのを喜んで待つてゐたのも、恐らくは中澤君が友人中の隨一人であつたらうと思ふ。其の中澤君の訃を吉江君は何處かで聞かなければならぬのである。わたしは中澤君が吉江君につひに逢へずに逝かれる其の心残りを思ふと同時に、吉江君がはじめてそれを知つた時の胸中をも想像して、心が暗然とした。

所が今日、中澤君の追憶を書かうとしてゐた今日、偶然にもわたしは吉江君から、多分、ヨウロッパからは最後のものであらうと思はれる便りを受取つた。それは六月二十八日にパリで書かれたもので、七月十七日マルセイユ發の丹波丸に席を取つたから、九月初旬には東京に着く事と思ひますと書いてあつた。わたしは吉江君がこの春イタリヤのはうへ旅行されて、わたしがこの春翻譯した『クオ

レ』の中で近づきになつたロオマや、ナポリや、ヴェネチヤや、ミラノや、トリノや、ピサやに滞在して、南歐の風光を見てまはつたといふ敘述に心を惹かれながら、次第に讀み進んで行つた時に、「僕の懸念に堪へないのは中澤君の病氣です。先日電報で問合せたが、一時よくてまた悪いらしいので心配でたまりません。」とある所まで行くと、わたしはぎよつとして、心がひたと黙つてしまつた。

わたしは手紙を静かに下に置いた。そして同封してあつたロオマのフォーラムの古蹟で、やはりわたしの知人でもある落合太郎氏と一緒に撮つた吉江君の寫眞を取つて、あのなつかしい、静かな、落ちついた微笑を含んでゐるやうな吉江君の顔をぢつと見守つた。何といふはかない二人の廻り合せだつたであらう！ 中澤君は待つて待つて待ちわびてゐた。吉江君はまた、どんなにか中澤君の事を心配しながら、多分今は、一日も早くと急いだ心で、歸朝の航海の中途にあらうに、しかもこの親しい二人の友人は、既に幽明境を異にしてゐるのである。

わたしの黙つた心は次第に控めつけられるやうな心地がして來た。熱い涙が次第に臉に満ちて來た。

○
中澤君に對するわたしの記憶の重なるものは、大抵吉江君とも關聯してゐる。一緒に武藏野を歩きまはつた時も、中澤君と吉江君と、それから田山さんとわたしとであつた。其の時は獨歩の記念碑を武藏野の何處かに建てようといふので、其の場所を選びに出掛けたのであつた。もう七八年も前の初夏のことである。わたし達は吉祥寺の驛で降りて、井の頭の辨天へ行つたり、其の上の寺を訪うたり、あたりの野原を物色したりしてから、深大寺から調布の町を通つて、登戸で多摩川を渡つて、二子の方へ——獨歩が『忘れ得ぬ人々』の舞臺に取つた二子の方へ——行つたのだつた。

其時、登戸から二子の方へ向つた時には、もうずゐぶんと方々を歩きまはつた

後で、足は疲れてゐたし、日は暮れかけてゐた。しかも道はまだ一里以上もあると聞いた時に、吉江君は振返つて落日を眺めながら、

「あゝ日は虞淵に沈まんとす」と、ふと暗誦するやうな調子で言つた。すると中澤君がそれを受けて、

「それで今日の紀行文も完結したねえ、」と笑つて言つた。「吉祥寺の踏切を通る時に、此の日天氣晴朗で、一瓢は途中からだか携へたし……」

といふのは、其の日わたし達は、『江戸名所圖會』で知つてゐた深大寺で名物のそばが食べられるであらうと思つて行つた當が外れて、すき腹を抱へて、調布の町まで行つて、二時頃にやつと晝飯にありつけたのであつた。其の時、其處の小料理屋から、飲み残した酒を正宗の小罎に充たして、途中の楽しみにしようと言つて、田山さんがポケットに入れて持つて來たのだつた。

そして料理屋の門を出た時、

「併し何か肴がなければ……」

中澤君はさう言つて、丁度ぢきそばにあつた乾物屋の店先に立つて、鰯を買つて來たのだつた。そしてそれを、登戸の土手まで來た時、野天の下で、枯木や枯枝を拾ひ集めて焼いたりしたのだつた。

其の晩わたし達は二子の龜屋に泊つた。

ああ、間もなく吉江君は歸つて來る。しかし、中澤君と一緒に旅は、もう永久にすることが出來ないのである。

○

も一つ、これも七八年前の話であるが、中澤君が主唱の下に、吉江君や、小山内君や、わたしなどの間で、『海外文學』といふ雑誌を出さうといふ計畫を立てたことがあつた。主として泰西の作品や思想やを翻譯したり紹介したりして、日本の文壇に多少なりとも基礎的知識を移植することに依つて分相應の寄與をしよう

といふのが主意であつた。そして一夜、中澤君の元園町の家に集つて、それに就いて凝議した。部数は、いくら賣れようとも、また賣れなからうとも、固く五百ときめて、それ以上にもそれ以下にもしまいと云ふ案であつた。そして其の一冊一冊に番號を附して、何號は誰が持つてゐるといふことが明瞭に分るやうに、一切直接購讀の方法に依らなければ賣らないといふ案であつた。無論、部數を限る當然の結果として、値段は高くならうけれども、もともと純藝術的な、些のジャアナリスチックな臭味をも帯ばせまいとする爲には、それも止むを得ないであらうが故に、雑誌そのものを抜群によくして、そしてもし後にそれが古本屋にでも現れるやうなことがあれば、一冊何圓もするといふやうに、古くなれば古くなるほど値段の出るやうな、高等な、立派な藝術的な雑誌を作らうといふ案であつた。尤も、資金の都合で、これはたうとう實現されるまでには至らなかつたが、しかし、わたしなどの心の底には、いまだに其の案がこびりついてゐて、必ずしも海

外文學の翻譯紹介と限らずとも、さういふ種類の雑誌を一つ出して見たいといふ希望が残つてゐる。其の時の中澤君の立案は、いかにも精密なもので、資金の融通がつきさへすれば直に實行される筈であつたのだが、……それも今は、かひなき追憶の一つになつてしまつた。

○

昨日の告別式にわたし達が參列しようとして荻窪の停車場に降りた時には、雨が、篠突くといはうか、車軸を流さんばかりといはうか、降つて降つてどしや降りに降り抜いた。そして焼香を済ましてまた停車場へ引返さうとした時には、更に一層猛烈に降り襲つた。が、停車場に着いて、歸りの切符など買つてしまふと、俄に小降りになつて、電車に乗り込んでしまつた頃には、すつと霽れあがりかけて來た。其の時誰かが言つた。

「まるで今日の雨は、中澤君の、馬鹿野郎みただね。われ／＼は其の馬鹿野郎

の「鳴を浴せられに來たやうなものだね。」

中澤君の「馬鹿野郎」はそれほど有名なものであつた。とはいへ、中澤君の「馬鹿野郎」は、殆ど酔つた時の曖昧なもので、相手が誰であらうと構はなかつた。絶對平等、無差別無選擇であつた。一緒に酒を飲んで、——勿論、中澤君が酔ふほど飲んだ時に、——この馬鹿野郎を浴せられなかつたものはないと言つてもいいくらゐであつた。世間にはよくふだんしらすの時には言ひたいことも言はずにゐて、酔ふと其鬱憤を晴らす爲に、罵倒などするものもあるが、中澤君の「馬鹿野郎」はさういふ種類のものでもなかつたやうだ。もしさうだとすれば、頗る毒のない、無邪氣な鬱憤であつたといふべきである。かつて獨歩は、中澤君のこの馬鹿野郎が始まつた時に、「そら、中澤の都々逸がはじまつた」と獨得の警句を言つてにこ／＼してゐたものである。

○

或時、柳橋の柳光亭で宴會のあつた時であつた。配膳が濟んで酒にならうとした時に、それまで好酒家として聞えてゐた或人が、身體の爲に酒を止めた、と言つて、盃を手にとらなかつた。

その時、中澤君はわたしに向つて、

「さういふものだらうか。僕なんか好きな物を止してまでも長生きしようとは思はないね、」と小聲で、しかししみじみと言つた。

「え、」とわたしは其の時、深くは氣にも留めずに答へたのだが、爾來、人が酒を止めたといふ話を聞く度毎に、中澤君の言つた言葉が胸に浮んで來た。

實際、中澤君の酒は確かに徹底してゐた。

いや、嘗に酒ばかりではなかつた。中澤君は何事にも徹底してゐた人であつた。

『文章世界』のこと

編輯の七年間

『文章世界』は其創刊號を明治三十九年の三月十五日に出した。今から二十七八年も前のことで、思へば遠い昔である。主筆は田山花袋氏。編輯は私。まつたくの二人きりで、其前月、即ち二月の六日に、わたしが博文館に入つた時から、其後、大正元年の十二月二十日に、田山さんが、突然、博文館に出勤しなくともよいといふことになつた日まで、凡そ七年間ほど、ずうつと一日のやうに、わたしたちは向き合せたテーブル越しに互に見なれた顔を見合つてゐた。その七年間に、自然主義といふ大きな文藝上の運動が起つて、そして、いつかまた其勢ひが衰へ

かけてゐたのである。で、その思ひ出は、當然、さういふ問題に觸れて行くべきであらうと思ふが、——といふのは、主筆の田山さんは、その運動の隠れもないチャンピオンであり、『文章世界』はたしかに其壇場の一つでもあつたのだから、——が、まことに無念なことには、今、わたしは手許に『文章世界』の一冊をも保存してゐない爲に、何をたよりに其絲口を引き出さうかの見當がつかない。で、こゝにはたゞ漫然と、記憶に浮んで來ることをそのまゝ何の聯絡もなく、斷片的に書き記して行つて見る。

創刊の趣旨

さて、第一に思ひ出されるのは發刊の趣旨である。今日、『文章世界』が何かと話題になつたり、再吟味されたりするのは、いふまでもなく文學史的に其意義をたづねられるのであらうと思ふが、この雑誌のそもそもの發刊趣旨は、まことに

皮肉なことには寧ろ反文學的なところに在つた。尤も、わたしは、主筆の田山さんが既にすつかり立案してしまつたところへ、ただ編輯員として入つたのだから、さういふ趣旨や何かもあとで聞かされた話であるが、それに依ると斯うである。

——其當時の青年が、いはゆる美文だの新體詩だのといふものは、誰れも彼れもがそれ／＼相當に書いたり作つたりするけれども、實社會に出て必要な文章、例へば手紙のやうなものになると、一向だめで、見舞狀一つすら満足には書けない者が多いといふので、この餘りにも文學的な、浮華輕佻な風潮を博文館主の大橋新太郎氏が深く慨いて、さういふ實用的の文章を一般の青年に書き習はせるやうにしたいがために此雜誌の發刊を思ひ立たれたのだといふことであつた。

今は、美文だの、新體詩だのといふと、其名稱からして既に諸君には耳遠いものかと思ふが、美文といふのは、所謂雅俗折衷の半擬古文式な文章で、頗る抒情賑の勝つたものだつた。今日から顧みると、まことに冷汗物だが、現にわたしな

ども、其前年、即ち明治三十八年に『新聲』といふ文學雜誌を千葉江東（龜雄）君と共に編輯してゐたころには、ジッケンスやモウバッサンを翻譯するにも、ひどく苦勞して、この美文脈の文章でやつたものだつた。ずつと評論家で通つて来たやうにも思はれてゐる千葉君にも、たしか『いざさらば』といふ名であつたと思ふが、美文集が一冊ある筈だ。新體詩といふ名は、『文章世界』でも、はじめの間は其まゝ使つてゐたが、後に「長詩」と變へたとおぼえてゐる。たゞの「詩」としたのは、よつほど後のことであつたらう。創刊當時は、「詩」といへば、一般に漢詩のことであり、詩人といへば漢詩人のことであつて、漢詩の勢力はまだ中盛んであつた。で、『文章世界』でも漢詩の評釋を載せたり、讀者からもこれを募集したりした。

發刊の趣旨が、既に前述のやうなものであつたから、創刊當時の『文章世界』がまつたくの作文雜誌であつたのに不思議はない。田山さんも、わたしも、出來

るだけ文學的にはならないやうにと氣をつけた。が、一面、練習雑誌であるといふ本来の約束上、誌面の約半ばを割いて、應募作品の發表舞臺に當てることにしてゐたが、その募集種目の中には、小説も入つてゐた。小説もまた文體の一種だからといふのであつたが、これが後になつて考へると、發刊趣旨に對する反逆の萌芽だつたのである。

諸大家訪問

わたしは頻りに文章界の大家や先輩を訪問して、原稿を依頼したり、談話筆記を取つてまはつたりした。その中には、今もなほ特異な記憶となつて残つてゐることなども少くない。依田學海氏をお訪ねした時のことなども其一つである。

依田氏は其ころ神田の小川町に住んでゐられた。今はすっかり道路が變つてしまつたので見當がつかねるが、其ころは神田橋のほうから來て突き當つた少し

左寄りのところに路地があつて、依田氏の住居は其路地を入つた直ぐ左側のところに在つた。其すぐ先を左へ曲つた右側のところには佐佐木信綱氏が住んでゐられ、更にまた、元の路地をまつすぐに奥へ行つた右側には、其ころ才人といはれた畫家の一條成美氏が住んでゐられた。佐佐木氏のお宅が堂々とした二階家であつたに反して、一條氏のお住居は、二た間か三間の棟割長屋で、低い軒端には朝顔の蔓が這ひまはつてゐるといふやうな風景であつたのをおぼえてゐる。

ところで、學海氏だが、氏はそのころ、もう七十六歳の高齢で、白鬚を長く胸に垂らしてゐられた。夙に一種の理想を寓した歴史小説を書かれたり、脚本を作られたり、批評をもされたりなどして、特に趣味の高尙雅醇なのを以て聞えてゐた。

若輩なわたしは、勿論、仰ぎ見るやうな氣持で翁の前に畏まつて、さて、問題は何であつたか忘れたが、とにかく、それに就ての翁の意見を謹んでおたづねし

たのである。

すると、翁は、微笑を含んで、うなづきうなづき聽いてゐられた末に、

「それで、先生の御意見は？」

と、しづかに反問された。

わたしに取つて、單に「先生」といふ言葉ですぐに頭に來るのは、坪内先生だけである。が、其問題は、坪内先生には何の關係もないことだつたので、わたしは、依田氏が、どうしてわたしが早稻田出の者であることを知つてゐられるのかといふことをすら考へて見る違もなく、

「いえ。先生にはまだ何も伺つて居りません」と言つた。

「いや。先生の御意見です」と、依田氏は繰返された。

「先生、と申しますと……？」

「そちらの」と、氏は右の手をちよつとわたしのはうへ出して、「先生です。」

「わたくしの先生と申しますと、坪内先生ですが……」

「いや、坪内さんではありません」と、依田氏はにつこりと笑つて、わたしの名刺を取上げると、もう一度一瞥してから、「前田先生の御意見です。」

わたしは、はつとした。勿論、顔は眞赤になつたらう。この老大家が眇たる青年記者に向つて、「先生」と呼ぼうとなど誰が想像しよう！わたしはすつかり、とちつた。

が、あとで館に歸つてから田山さんに此事をお話すると、

「なあに、君、あゝいふ年輩の文學者たちは、お互に先生といふ敬稱を使つてゐるので、何も不思議なことではないのだよ。つまり、漢學者のはうの習慣から來たことで、文人相輕んずの反對を挨拶に見せてゐるんだね。」と言ふことだつた。

もう一つは饗庭篁村氏。氏を向島のお住居におたづねすると、一段高くなつたやうな、中二階風のお座敷に通された。まるまつちいやうな姿をした篁村氏は、

これも何の問題であつたか、要件は忘れたが、わたしが寄稿を御依頼すると、ぼん／＼と手を拍いて、老夫人をお呼びになつた。

「どうだらうね。これ／＼のことを書くやうにといふお話で、この方がおいでたのだが、わしに出来るだらうか？」

「さやうですね。お出来になりませう。」

ごくしづかな、落ちついた調子で、斯ういふ對話が御夫婦の間にあつてから、

「では、お引受けしておきませう」といふ御挨拶であつた。

主義の宣傳と使徒の養成

本欄に創作を出すやうになつたのは、創刊後一年くらゐも経つてからであつたとおぼえてゐる。小説もまた文章の體様の一つであるといふ理由の下に、はじめは、そのお手本にといふ口實で、そつと載せて見たやうな恰好であつたが、これ

は、いはゞ斥候を放つた形で、それからといふもの、次第に編輯の調子が文學的に變つて行つた。そして、いくらも経たないうちに、自然主義運動の壇場ともなつたのである。

けれども、一方、投書雑誌としての使命はどこまでも閑却しまいとしたので、そのはうにも力を注いだ。つまり、一方で新文學の主義を宣傳すると同時に、他方で使徒の養成に努めた形であつた。

で、(といふわけでもないが)『文章世界』の投書家であつた人々の中には、今は、文壇で大いに名を成してゐられる人や、新聞社、雑誌社の有力な記者や、公私立大學の教授助教や、詩人、歌人、俳人、畫家、乃至地方の小學校長などが無数にある。今、わたしが指を折つて數へて見ても、三四十人は容易に擧げ得られる。けれども、雑誌に投書したといふことは、何も其雑誌から出たといふことにはならないし、少くとも、さういはれるのを好まない人々もあるであらうと思ふ

から、當然、其名を擧げることには遠慮すべきであらう。

六月會の記事

愛讀者の會に六月會といふのがあつた。中村泣花（武羅夫）氏、水守夕雨（龜之助）氏、藤木紫蔭（九三）氏、石田秋峰（勝三郎）氏、らの主唱の下に出來たもので、明治四十年の六月にはじめて其發會をしたので、六月會といふ名をわたしがつけたとおぼえてゐる。此會には、田山さんやわたしが殆ど毎會出席した外に、小栗風葉氏や眞山青果氏をはじめ、文壇の錚々たる人たちがよく出席した。で、其例會の記事を中村君がいつも書いてゐたが、それが全讀者に非常に受けて、讀者間の親しみを増させる好い讀物となつてゐた。

ところが、其十一回目の時に、田山さんは『生』の執筆のために出られず、わたしは増刊の原稿に追はれて缺席したが、例によつて其記事が送られて來たので、

わたしは一讀の上、早速工場へまはすやうに指定して、テーブルの上においた。

と、田山さんが何氣なくそれを取つて讀んでゐられたが、突然、

「君！」

と、非常に強い、どなりつけるやうな語氣でわたしを呼びかけた。

「君は、これを出す氣なのか？」

「え？」と、わたしは驚いて、顔をあげると、「ええ。どうしてです？」

「こんなもの」と、田山さんはぼんと原稿を投げ出して、「出すことならん。怪しからん。」

さういつて、ぐつと下唇を噛んだ。

「どうしてです？ 別にどうつてところもないぢやありませんか？」

「ないことがあるもんか。ばかにしてゐる。僕は君、彼等と議論をしようと思つてゐるんぢやない。教へてやらうとしてゐるんだ。それなのに、失敬な！……」

さういつて、田山さんは又ぐつと下唇を嚙んでゐたが、そのうちに巻紙を展げて、手紙を書き出した。

わたしはしかし、其原稿に未練を残して、読み返して見たが、どこがそんなに田山さんを怒らしたのか見當がつかなくかつた。

「どこがいけないんです？　そこだけ直して出さうぢやありませんか？」

「僕が君、いけないといつたら、いけないにしたらいいぢやないか！」

田山さんはわたしにも全く怒つて、せつせと手紙を書いた。それは中村君に宛てたものだつた。

その翌々日であつたかと思ふ。中村君からわたしに手紙が来て、田山先生から絶交を申渡されたが、わたしは見當もつかなくて全く困惑してゐる。どうか執成していただきたいといふ意味だつたとおぼえてゐる。で、わたしが其事を言ひ出すと、田山さんは、

「この事に就ては、一切口を出して貰ひたくない。僕は眞剣なんだから。」
ぼんとわたしは一蹴されて、たうとう中村君にもそのまゝ返事も出さなかつたとおぼえてゐる。

ところで、何を田山さんはそんなに怒つたのか？

其時の中村君の原稿は、今もわたしの手許に在るが、——今なら、中村君も斯うはいはなかつたらうし、田山さんも徒らにむかつばらを立ててもしまはなかつたらうと思ふのだが——それは、田山さんが『蒲團』で書き、小栗さんが、たしか『耽溺』で書いたりして問題になつた中年者の戀を、中村君が一種の贅澤に過ぎないといつて罵倒したのである。そして、「中年者に比べて、現在の青年は今少し眞面目だからな。中年者が何、若輩がと云つて青年を馬鹿にしてゐる間に、やがて、青年の作つて行く新らしい時代の思潮の圏外に、ほうり出されるのが中年者の運命さ」と青年の氣焰をあげてゐたのである。

平靜の時なら、あはは、と笑つて済ますことをも、渦中にゐると、つい憤激せずにはゐられないのが眞剣な人の面目かも知れない。田山さんも、あとでは、大げなかつたと思つたらう。

題と署名とだけの原稿紙

新片町の島崎さんのお宅へ原稿を催促に行つたことなども思ひ出の一つである。題の下に島崎藤村とだけ書いてある原稿紙を前に、氏は机に向つて端坐してゐられる。そばの火鉢には敷島の吸殻が林をなしてゐる。他には茶器。

わたしはきのふ行つて、けふ行つて、あしたまた行つて、やはり題と署名とだけしかない同じ原稿紙を前に端然としてゐられる氏を見て、黙つてお辭儀をして歸つて來たこともあつた。

『人物評論』十二月號・昭和八年十一月五日

『残雪』と人間苦

パリにゐる吉江君から最近に受取つた手紙は、わたしにいろ／＼な事を思はせた。その中で、吉江君は不安なパリの春の状態を描くと共に、そこに天涯の孤客として淋しく暮してゐる遊子の心持を巨細に抒べてゐた。東京にゐると、つい近くに海があると思つてゐるせむか、その海の存在すら忘れてゐる日が多いのに、パリにゐるとその海が戀しくてならない。四月の休みにブルターニュへ行かうかと思つてゐると、ある佛人のマドモアゼルに話したら、「ムッシュ、エ、ゼジイ、パール、ノスタルジイ、（は、懐郷病に捉はれましたね）といつて笑はれたと書いたあとで、吉江君は、「海を戀するのが懐郷病とはあまり察しがよすぎる。それほ

ど僕自身海國男兒とも思つてはゐないのですが、敏感なパリジエンヌは微笑の中に人の心を讀むものと見える」とあのくりくりした目を笑はせながら言つてゐるやうに書いてゐた。しかし、これは必ずしもパリジエンヌの敏感に俟つまでもないであらう。『不如歸』の浪子ではないが、海の水は其の大きな脈搏のうちには何万里をも漂はせて、はるかに東洋の岸をも洗つてゐる。それに情緒を乗せて、行方を故國に見ようとするのは恐らく遊子の願ひであらう。

けれども、パリの生活は、さういふ感傷の中に自分を見出してばかりはゐられぬほどに不安であるらしい。この手紙を書いてゐた夜の八時に、パリ全市の電燈がぼつと消えて、全くの暗黒の中に、人は皆兢兢々として一夜を明かしたことが書いてあつた。獨機が襲來したからである。吉江君はかう書いてゐる。――

「こゝまで書いて來たら路上が大騒ぎです。物凄い笛聲を立てて自動車走りまはる。そのフュー〜といふ音といつたら實際氣味が悪いと思つてゐると、隣

室のステドワが "Oh! Monsieur, on a Signale," と大騒ぎを立てながら僕の戸を叩いて下へかけおりに行きました。何だと思ひたまふ。今現にその無氣味な響が街上に走つてゐます。ポオーポオーと全く動物の斷末魔の苦鳴のやうです。今、急にしんとしてしまつた。全く深い沈黙になつてしまつた。耳を澄ましてゐると、かすかに砲聲が響く。一つ二つ、……またたうとう獨機がやつて來たのです。……闇の中で砲聲を聞いてゐるのは頗る無氣味なものです。巴里には地震もなければ火事もまだない。天然の雷も怖くはない。が昨今はこの獨逸の人造落雷が時々人の膽を冷す。先づ東京に於ける暗夜の大雷鳴を想像し給へ。そしてその雷が必ず市中へ少くも五六個所はきまつて落ちると思ひ給へ。落ちたら最後三四十人の死傷は出来る。……」

而かも吉江君は、さういふ不安な都のなかで、健康で勉強してゐる。音にフランスの文學ばかりではない、故國の文壇にも注意を拂つて、其の進歩の跡を、其の

推移の跡を、はるかに喜びを以て、靜かに落ちついて眺めてゐる。田山さんの『残雪』なども、吉江君は新聞ですつと読んでゐた。そしてわたしなどがまだ讀む機會を得ずにゐるうちに、却つて既にそれに就いての感想までも纏めてゐた。

吉江君はしかし、直接に作品の批評はしてゐなかつた。寧ろそれから得て來た感想の中に、吉江君自身の主張を盛つてゐた。——「これからの道德は要するに性の問題でせう。女にヴィルジニテが尊いなら男に童貞が同じく尊い筈です。童貞をわけなく亂雑な女性の蹂躪に委せてゐることは男の生命を肉體的にも精神的にも弱めてしまふ。多數の女性を征服したやうな氣がしてゐるうちに却つて自分が蹂躪されてゐる。それだから異性がおそろしいといふのではないのです。それだから兩性共に自覺して自分の靈を尊重せよといふのです。」といつた後で、吉江君は、「こんな事を言つたらまた田山さんはまだ若い」と言はれるかも知れないが、今の田山さんは始めて僕等のいふ事を解してくれるでせう。始めてなぞとい

つては失禮だが、實は田山さんに取つて始めて性慾問題が宗教問題に連接してゐる事と思ひます。」といつてゐる。

この吉江君の言葉に刺戟されて、わたしは『残雪』が本になるや否や、急いで、貪るやうに卒讀した。しかし、わたしは不幸にして吉江君と同じやうな結論には達しなかつた。わたしは寧ろ今まで重んじて來た靈性が、誇りを以て顧みてゐた青年時代の童貞が、空虚な内容を以て自分の生活を貧しくしてゐたことを痛感した。わたしは寧ろドンジャンの亞流となつて、亂雑な女性のために童貞を蹂躪させて來なかつたことを悔いる淋しさを感じた。一夫一婦が眞理であると云ふことは常識的には結構な掟であらう。わたしはそれを疑はない。けれども、もし男女兩性が互ひに異性を理解することに依つて、男女兩性の組織する人生を進歩させ、向上させると云ふことが偽りの眞理でないならば、彼等が恐ろしい煩惱の渦巻の中で、七轉八倒して、そして辛くも溺れることから切り抜けることを空しい努力

だとは云ふことが出来ぬであらう。一夫一婦が睦しく平凡に妥協して幸福に暮らしてゐる其の状態からは、一瞬の間に千變萬化する人心の機微は到底掴むことが出来ない。恐らく人生の一切の場合に於いて、其の皮相を軽く撫でて行くことは、何の新発見をも其當事者に與へぬであらう。唯平凡に現世を安價なる幸福に暮して行くことがもし人間全體の能事であれば兎も角、苟くも未來の可能を信じて、更によき生活を其處に創造しようとする願ひを持つのが不合理でないならば、人が端倪すべからざる心理の交錯の中に、惡戰苦闘するあの人間苦を尊まなければならぬであらう。わたしは『殘雪』の主人公に於いて、この人間苦を苦しむ勇士の姿を見た。而かも彼は、彼自身の苦しみを以て自分一人の苦しみとはしなかつた。彼は自分が苦しむこの苦しみは、同時に萬人の苦しみであることを痛感してゐた。其處に彼の偉大さがある。現象をして現象たらしめる實在の底に於ては、萬人の生命が一つの流れになつて微妙な諧調を立ててゐる。それを彼は信じてゐ

た。労働者の、太い健かな手に、青白い滑らかな小さい自分の手と同じ心理を、あらゆる明暗と表裏と悲喜との境を通つて來た心理を直觀して、堪らなく懐かしくなるのを感じた彼は、同時に大歡喜を受けた得難い經驗を、欺騙の多い艱難に満ちた末法の世間に分つてやりたいと思ふ悲願を起す彼であつた。

しかし、この法悅境に立つまでの彼の心理は、彼が世間の愛着に執することの強かつた人であつただけに、殆ど血塗れの苦闘を経て來て居る。彼はこの人間苦のために、いかに苦悶し、いかに顛倒し、いかに懊惱したか。彼は烈しい渦を卷いて居る世間の刹那の營みのために、幾度傷ついて自ら亡びようとしたか知れなかつた。『殘雪』の一篇は、實にこの人間苦の展開を層々と積み重ねて行つた後に、道に達し得た解脫境の體現である。そこには人生を思ひ、道德を思ひ、藝術を思ひ、社會を思ふ熱烈な人間の大量になつた獅子奮迅の姿が見られる。彼は到る處で暗い壁に突き當つた。そして其處に必ず深い心理の渦卷を見た。而かも、

其の渦巻の中から抜け出さうと腕き苦しむ努力のうちに更に深い心理の渦巻いてゐるのを發見した。この渦巻いてゐる心理、その心理が極めて散漫な、人生その物の姿の如く散漫な物象を常に統一してゐる。そして主人公は最後に其の心理の頂點に立つたのである。

されば主人公の心理を以て、直に作者自身の心理であると思つて見る時、この作は作者の經て來た人生のエキスである。作者が今立つてゐる心境から經て來た人生を俯瞰してゐる心理の全景である。

其の意味に於いて、作者は全く赤裸々になつて、この一篇の上に自己を暴露してゐる。リテラリーに懺悔する形を以て、告白する形を以て、内的生活の一切の閱歷をありの儘に書いてゐる。そして此處では客觀化などといふことは、問題ともしてゐなかつたほどに主觀的に直截になつてゐる。それ故、これを一個の藝術品として見る時は、所謂藝術味の稀薄になつてゐることを思はずにはゐられない。

けれども作者が主人公をして次ぎのやうに言はしめてゐる所を見れば、即ち「すぐれた藝術は矢張人を救ふであらう。人間の苦艱をその縛から解くであらう。しかし、藝術の根本は經文のやうな熱烈なものではあり得ない。またそれと同時に、藝術に對するものの態度と、經文に對するものの態度とは著しく違つてゐる。折角その蔭に人間を救ふ程の力あるものを藏してゐても、藝術の表現では有效にそれを傳へることの出来ないやうな處がある」。といはしめてゐる所を見れば、作者は藝術的效果の多少などといふことは既に問題にしてゐなかつたやうに見える。作者は寧ろ自己の心理の完全なる表白に依つて、同じ實在に根ざしてゐる一切の人間の苦艱を濟度しようとする勇猛心に形を賦與してゐるやうに見える。

即ち『殘雪』の一篇は、作者はこれを藝術として見られるよりも、寧ろ藝術家たる人間の苦悶を盛つた一卷の經文として見られることを餘計に欲してゐるのではないであらうか。少くとも作者の「人間」が、縦横無礙に生きて行かうとする

法身の世界への首途を飾る作品である所のこの一篇は、將來のこの作者を藝術界にいかにか生かして行くか、實世間にいかにか生かして行くか、意義深い大きな謎をわたし達の前に提供したものである。そしてこの轉機に立つた作者の今の「人間」を完全に識るべき鍵となつてゐる。

—『時事新報』・大正七年五月三十日—

年齢に關した事を

この十一月には、田山さんと徳田さんと、兩先輩の誕生五十年のお祝ひが花々しく催されるといふことで、誠に以ておめでたい。それに就いて、田山さんの事を何かわたしにも書けといふことであるが、……さて、さう言はれて見ると、あんまりいろ／＼な事を知り過ぎてゐるためか、それとも、知つてゐるのはうはつらばかりの事で、本當は何にも知らないためか、何をどう書いたら時宜に適したものであるかも見當がつかない。

田山さんの人生に對する態度、田山さんの藝術に對する態度、田山さんの明治大正の文學に寄與した功績、さういふ開き直つて議すべき事といふ事はみんな、

既にあまりに世間周知の事で、であるからこそ文壇的にお祝ひをもしようといふのであらうが故に、今さら事新らしく言つて見るにも及ばぬだらう。少くとも、今この際に方つて、特に言つて見ようとするのは少々しらししいやうな氣持がする。

で、わたしは、お祝ひが年齢に關してゐるのであるから、何かやつぱり年齢に關した事で、思ひついた事を二つ三つ書いて見る事にする。

田山さんが四十になつた頃の事であつた。ある日わたしにかう言はれた。

「人間も四十になつて始めて人生の全圖が先づ見渡せると言つていいね。といふのは、自分が生きて來たのが四十年、その四十年の間に見て來た人達が順々にさきへ生きて行つて四十年、年齢の上からいふと四十一から八十までになつてゐる譯だからね。四十を中心にして前後へ伸びた四十年、都合八十年の生活が空想で

なしに觀照することが出来るやうになつて始めて人生の相も本當に分るといふやうなものだからね。僕なども今にしてはじめて五十六十の人の心理も、七十八十の人の生活も、ほぼそれと見通せるやうな氣がするよ。」

勿論、凡そ藝術は、つひに作者の主觀が其の根柢になつてゐるのであるから、嚴密にいへば、二十の人には二十の人の人生が、三十の人には三十の人の人生が、四十五十の人には四十五十の人の人生が、それ／＼表現されるのであらうけれど、そしてそれ故にこそまた面白いのであらうけれど、一方に想像力といふものがあるつて、かなり容易に年齢といふ柵くらは突き破らせる。そして必ずしも體驗などはなくつても、其の想像と、そして洞察との力でもつて、青年にして老人の生活をも、また男にして女の心理をも、或程度までは表現することを可能ならしめる。そしてそこに一つの世界を創造させる。

しかし、若い人々の作つたさういふ世界は、概して純で、新鮮味、潑刺味、爽

快味、さういふものこそあるにはあつても、規模が小さかつたり、底が淺かつたり、人生味が稀薄だつたりする。そこへ行くと、年をとつた人の作つた世界はさすがに複雑だ。なんでもない一つの事象を書いただけでも、深く人間性に根を張つた所があつて、廣い人生をそのうちに髣髴と示唆して呉れる。そして人生の悠久な事をも自然と領かせる。徹した體驗そのものが、其の本來の約束上、既に立體になつてゐるからである。例へば、『田舎教師』のやうな作品は、若い田山さんにしてなほ且つ書き得たであらうけれども、『時は過ぎ行く』のやうな作品は、年をした田山さんでなければよく書き得なかつたであらう。『残雪』の主人公のあの愛慾の惱みの如きも、實感そのものをたゞそれだけのものとして表現するだけであつたら、若い作家のうちにも或ひは企て及ぶものがないとはいはれぬかも知れないが、それをあゝまで完全に藝術化して、そして其上に、女主人公のあの背信をも大きく許して抱擁するやうな寛大さは、年をした田山さんにして始めてよく描き

得た所であらう。

田山さんが四十の年齢を持ち出して、前に言つたやうな述懐を漏らされた時には、わたしはやつとまだ三十を越したばかりであつた。殊に世間の事には極めてうぶな、今でもさうであるが、極めて生一本な世間知らずであつた。それ故、さういふものかと思つただけだつたが、いつか馬齢を加へた今になつて、始めて其の眞實な事が「なるほど」と心から解りかけて來たやうな氣がして居る。

年齢は確に藝術家の、少くとも世相を對象としてゐる小説家の、大を成す一つの條件であらねばならぬ。

○

田山さんはずゐん早くから文壇に出てゐられた。處女作を出されたのはいくつの時であつたか知らないが、とにかく彼是三十年に近い間文壇の人として努力して來られた事は確かである。しかし、わたしが田山さんの主宰の下に、文章世界

の編輯員として一緒に仕事をする事になつた明治三十九年の二月、其の時田山さんはもう三十六歳になつてをられたけれど、まだ、本當の意味で、志を文壇に得てはをられなかつたやうである。勿論、其の以前から、頻りに泰西の新思潮を紹介されたり、露骨なる描寫で文壇の黎明を促進されたり、『重右衛門の最後』で他日の飛躍を約束されたり、舊來の文學に對して隱然たる一敵國の觀をなしてはゐたが、しかしまだ運命は快い微笑を田山さんに見せてはゐなかつた。田山さんが本當に崛起して、押しも押されぬ一城一國の主となつたのは、やはり『蒲團』を發表された三十七歳の時からとすべきであらう。

モウバツサンが三十一で“Boule de Suif”を出した時に、師のフロオベールは非常に喜んで彼に手紙を書いた。そして其の中で、“Boule de Suif”は傑作である、とわたしは君に言ひたくてたまらないのだ。ほんとに若いのに感心だ」と言つて褒めてゐる。

三十一でなほ且つ若いのといはれたのである。實際西洋などでも、この頃の事は知らないが、以前は詩人は概して若くして名を成したが、小説家は大抵年をしてから一家をなしたやうである。それから見ると、この頃の日本の文壇では、ずるぶんみんなが若くしてえらくなつてゐるやうである。中には若い故にえらくなる人達もあるやうである。小説家の大を成す一つの條件であらねばならぬと思はれる年齢も、今は價值が轉倒したやうである。今は時代がすっかり新らしくなつたがためか、それとも田山さんなどは大器晩成といふ方であつたがためか、とにかく刻苦精勵、十幾年か隠忍して、やつと認められた田山さん達の時代に比べて、今は確に、機運が若い人達に幸ひしてゐるやうである。

○

長い間の勤めの身から解放されて、田山さんが毎日博文館へ出なくともよくなつたのが大正元年の十二月、所謂四十二の厄年であつた。

其の時の田山さんは堂々たる大家になつてをられたから、物質上のことなどは恐らくびくともしなかつたであらうけれど、長い間滑かに軌道の上を走つて来た電車が、カアブの所で、ふと脱線しかけた時に乗客が驚くくらゐな不安は抱かれたことであつたであらう。

そこへ持つて来て、長い間の道づれであつた島崎さんが、俄にフランスへ行かれるといふことが其の際偶然にも起つて来た。もし敢て忖度することが許されるならば、それも何等かのショックを田山さんの心の上に與へはしなかつたであらうか。のみならず、ちやうど『残雪』の主人公に現はれたやうな愛慾、染着、さういふ所から起つた生の問題も、其頃の田山さんの心を最も強く悩ましてゐたかも知れなかつた。

三月の下旬、島崎さんはたうとう東京を出立された。それを鎌倉から更に箱根の方へまで田山さんは送つて行つて、別れを惜しまれた。そして月をおいて五月

になると、まるで一切の煩累から遁れようとしてもするやうに、獨りで日光の小さな荒れた僧房にこもつて思索と執筆とに耽られた。

七月の中旬、わたしも其の頃はもう扶持ばなれの身となつてゐたので、浪人の身の心易さに、其の日光の僧房へ押しかけて行つて、暫く雲水のやうな身を託した。田山さんは御飯も焚かれ、味噌汁も作られた。夕方になると、菊の葉、茗荷、さういつたいろくろな材料を寺の庭先や附屬した小さな畠などから漁つて来て、よくお得意の精進揚を作られたりした。手づくりの菜を肴に、いささかの晩酌をされるといふ事が、どんなにか其の頃の田山さんには楽しみであつた事だつたらう。わたしは茶碗一つも滅多に洗ふといふ事なしに、たゞ御馳走にばかりなつてゐた。といふのは、一つはわたしが夜更かしの朝寝坊であるのに反して、田山さんは朝まだ薄暗いうちから起き出られて、わたしが毎朝起きる十時を過ぎる頃までには、大抵もう其の日の仕事を済まされるといふ風であつたからと、今一

つは、お勝手の事なども自分でみんなやつた方が、結句世話が焼けないでいいと思つてゐられたらしかつたのを、さういふ事には進んで手を出したいほどの興味を持ってなかつたわたしが横着にもいゝ事にしたからだつた。思へば田山さんにお膳立までして貰つて、平氣で食つたり飲んだりするなどは、何といふ果報な事だつたらう。

其處へは照尊院の和尚さんが、輪王寺の方の其の日の務めを果たした夕方から、時たま、ふらりと話しに來られる外には、殆ど誰も來なかつた。

そのしいんとした静寂そのもののやうな山の僧房の中で、田山さんは午後になると、よくユイズマンズの "En Route" や "Cathedral" やを讀んでをられた。其の主人公のデュルタルの心理の上に、田山さんは靈犀一點相通する何物かを見出してゐたのではなからうか。「殘雪」の心境は其處から展けて來たのではなかつたか。

—「文章世界」大正九年十月十三日—

『再び草の野に』を讀む

—

この渦卷いた現實の相の中から「詩」を見出した作、もしくは「詩」を作り出した作、さういふものをばわたしはかなり長い間翹望してゐた。幾たびか其の要求をば文壇に向つて懇へたこともあつた。それがこの一月端なくも充たされた。田山花袋氏の新作『再び草の野に』に於いてである。

—

麥の畑や水田や村落やまたは、その間を縫つてゐる塵埃の白く颯る路など

で蔽はれてゐなかつた以前は、野はもつと荒涼としたものであつた。草藪が草藪に續き、林が林に續き、水は唯低きにつれて自由に流れ、鳥は靜かに春の花の埋れた中に鳴き交し、獸は野分のあとの亂れた草を踏み分けて走つた。偶々その廣い野の中を此方から向うに横ぎつた長い路があつたにしても、それは深い萱や薄で蔽はれて、通つて行く旅客も稀に、午後の日影は徒らにさびしく樹間から線を成してさし込んで來るばかりであつた。春になると、雲雀は高い聲でその純な戀を名乗るやうにして空に囀り揚つた。

さうだ。野はもと自然の姿をもつてゐた。しかし、いつまでも未開のままではゐなかつた。いつか人間の力がはいつて來て、樹木は伐られ、土は掘り起されて、畑となり田となつた。人間の住む家がぼつり／＼と出來て來た。二軒、三軒、四軒、五軒、やがて小さな聚落が出來た。人が生れて死んで行つた。墓が出來て寺が必要になつて來た。旅にやつれた行脚の僧が村人に引きとめられて、其處に脚を留

めて永住した。朝な夕なの讀經の聲が掘建小屋のやうな寺の中から聞えて來た。

村の人達はその讀經の聲に促されたやうにして、またそれに力づけられたやうにして辛い艱難な労働を續けた。生れたものは働いてそして死んで行かなければならなかつた。月はさびしくかれ等の上を照らし、星はきらきらと天上の榮えを語つた。

さういふうちにも時は移つて、村は次第に大きくなつた、次第に富み榮えて來た。

作者はさういふ舞臺を北武藏野の北のはづれ、利根川に沿つた野の一角に選んでゐる。しかし、恐らく作者の意圖からいへば、場所は必ずしも此處と特に定めなくともよかつたのであらう。さういふ自然と人生との交錯は、そしてさういふ人生の辛い營みは、到る處に發見さるべき姿だからである。たゞたま／＼作者の選んだ其の地に於いて、作者の描き、語り、且つ歌はうとするテーマにびたりと

合つた光景を發見したのであらう。……

いや、そればかりではない、村が此の到る處で發達して來たやうに、徐々とした自然の推移のまゝにされたならば、思ひがけない大きな變化が加へられずに残されたならば、丁度、昔、あの旅僧の脚をとめた寺から少し離れた所に、をりをり夕日に輝いて見える、蘆荻の深く繁つた錆びた小さな沼のやうに埋れたまゝで残されたならば、作者は恐らく此處に舞臺を取らなかつたであらう。

ところが、俄に驚くべき變化が其處へ來た。大きな文化の波がこの野の一角まで襲つて來た。鐵道が敷かれて汽車がやつて來たのである。そして其處に、かつて茫々とした草野の中に終端驛が置かれたのである。

この停車場を中心としたあたりの發達は目覺ましかつた。忽ちにして小さな繁華が其處へ押し寄せて來た。休憩店が出来る。小料理屋が出来る。新聞配達店が出来る。運送店が出来る。旅館が出来る。連れ込み宿が出来る。車夫の溜りが出

來て車が十二三臺も並んでゐる。煉瓦を焼く工場の煙突からは黒い煙が空に靡いてゐる。ハイカラな男や女の新しい麥藁帽子や派手なバラッルが、汽車の着く度に停車場から吐き出されて、草いきれのする野の路から土手の方へ、涼しい川風に向つて動いて行く。昔、交通が主として船に頼つた時代に、船宿として榮えた家や、大河に依つて劃られた國と國とを、かつて一條の棹で結びつけた渡船などが、一時逼塞して極端にさびれ果て、ゐた渡場などが、俄に息を吹き返して潑刺とした生氣をつけて來る。

何もかもが一時にどつと榮えて來た。新らしい色彩と香氣と樂聲とを持つた世界が展けて來た。主としては金と色と、人間の普通の慾の醸した世界が時の間に展けて來た。男女の關係が其處にも此處にも結ばれた。其の歡樂の底から喜劇と同時に悲劇が生れた。一方から見れば修羅場であつた。一方から見れば歡樂境であつた。かつて草の青々と茂つたこの野は、かくして大きな人生の縮圖と化し

た。

二三年の間の發展、この調子で進んで行つたならば、村はやがて町となつたであらう。人々が其の豫想に心を取られて、有頂天に日を送つたのも無理ではなかつた。

ところが、其處まで押し寄せた來た文化の波は其處で止まらなかつた。鐵橋が利根川にかゝり線路が先へ延長されて、汽車は上州の平野の方へ進んで行つた。終端驛であつた其處の大きな停車場は、前後の停車場との距離の關係から全く撤回されて、同じ名の小さな停車場が川を渡つて十五六町も行つた向うの桑畑の中に新たに置かれた。

悲運は忽ち其處に住んでゐる人々の上に来た。何處まで發達するか知れないと思つてゐた停車場のあたりの繁華も今は全く一場の夢と消えて、日増しにさびしい凋落の影が來た。昨日も一軒今日も一軒、明日もまた一軒、といふやうに家屋

は次第に取り崩されて、あとはまた元の草の野にかはつて行つた。

草は益々繁つて、残つた路も細く、果ては其の路すら半ばそれに埋められるやうになつた。唯、煉瓦を焼いた竈——煙突は既にひとり手に崩れて了つた——が赤く草原の中に、ある時ある人の事業の跡を語るものゝやうに夕日にあらはれて見えてゐるばかりであつた。枕流亭ももうなかつた。

時はまた靜かに經つた。

土手の上からは矢張美しいT川の流が見えて、冬は遠山の雪が金屬のやうに閃々と輝きわたつた。春はその草路のさゝやかな赤い花に露が置いて、天上の星の光が夜毎に來ては接吻した。雲雀はその變らない戀の唄を高く空にうたつた。

何といふ儂い人生の營みであらう。何といふ佻しい榮華の跡であらう。作者はこのルウインズの前に立つて、始めは野であり、後また野になつたこの自然の大

きな顯現の上に、無關心な循環の上に、大きな目を見張つてしみじみと驚嘆してゐる。

三

捉へたテーマが既に「詩」の領域である。作者は恐らく描き、語らうとするよりも歌はうとするところに重きを置いてこの題材に向つたのであらう。「その一」に始めの野を描き、「その二」に開かれた野の上に營まれた人間生活の種々相を描き、「その三」に再び野にかへつた光景を描いた構圖が、作者のこの意圖を明かに語つてゐる。

従つてこの一巻のうちには、所謂筋ともいふべきものはない。一貫した人間生活は描かれてゐない。事件は頻りに簇出するが、それらの間に必ずしも連絡があるのではない。たゞ人生の到る處に、常に起り得る雑多の現象が、この新らしく

開かれた野の上にも忽ち起つたことを示してゐるだけである。而かも作者はそれらを犇々と描いてゐる。しかし、それらの事件の意義と成行とを必ずしも語らうとしてゐるのではない。寧ろさういふ現象の生滅して過ぎて行く人生の相をば、そして其の上に臨んでゐる自然の無關心な顯現をば、用意してある埧塙の中に溶かし込んで、「詩」の効果を大にしようとしてゐるのである。

やがて人々は散じた。

月は靜かにあたりを照らした。物の影がすべて黒くはつきりとあざやかに見えた。若い車掌見習は餘り月がよいので、土手の上まで行つて、川などを眺めて暫くして戻つて來ると、あたりはもうしんとして、今し方さうした悲喜劇があつたとは思はれぬばかりに、Y屋の灯のさびしく靜かについてゐるのが覗かれた。主人も板場の男ももう其處にゐなかつた。お玉が唯一人ぼつねんと白い顔を其處に見せてゐた。

月はいよいよ冴え渡つた。

かういふ描寫のうちに、作者の持つたセンチメントの暗黙な脈搏は、この一巻の到る處に發見される。

しかし、其處に描かれた雑多の現象が、大抵色情の上から渦巻きあがつて來てゐることは、特に注意しなければならぬ。茲に作者の人生を觀てゐる觀方が窺はれるやうに思はれるからである。何もかも色の世の中だ。愛慾の羈絆、歡樂の報酬、人生のおとしあなは到る處にあるが、しかも人間の世の營みは、この樞軸をめぐつて成立つてゐる。一切の色彩は其處にある。これを餘所にしては人生の眞相は分らない。作者はさう觀てゐるやうに思はれる。

けれど一方にまた、さういふ境に實際にはいつて見ない者のあることをも作者は忘れてゐない。若い車掌見習は其の一人である。彼は好んで外國の小説などを讀んでゐたが、其の中に展開されてあるやうな色彩の濃い、刺戟の強い世界のあ

ることを初めのうちは信じなかつた。所が陸續と起つて來る目の前の事實に依つて、それらの必ずしも誇張でないことを、虚誕でないことを知つて來た。しかし彼はいつまでもちつと眺めてゐた。其の凝視がいつまで續くか。遂には其の渦卷の中に捲き込まれてしまふであらうか。とにかく彼は凝視を續けてゐる。

又、人間の自然に及ぼす影響に心をひそめて、其の慘害に對する感慨を日記に記しておくやうな若い小學教員もあつた。彼は野がまた元にかへつた時に、そこに榮枯盛衰の理を見、人生と歴史と、更に人間の心のうちにも常に起伏して來る生滅の光景を發見する。人間の運命、人生の情趣にまで思ひを馳せる。

しかし、作者はさういふ人々をも一樣に俯瞰してゐる。俯瞰して平等に描いてゐる。作者は特に何人のうちにもはひつてゐない。しかも影は一切の人間のうちに落してゐる。若い車掌見習のうちにも若い小學教員のうちにも、夫婦で間借をしてゐた文學者のうちにも、將たまた中年の驛長のうちにも、更にまた歡樂を事

としてゐる淫蕩な男や女のうちに、作者は影を映してゐる。特に一人の人間のうちにはゐないが、一切の人間のうちにゐる。そして無常な人生の波に揺られながら、其の相をぢつと眺めてゐる。作者は即いて同時に離れてゐる。離れて同時に即いてゐる。そして其の生きてゐる人生のすべてを擧げて、作者は自己のセンチメントの中に溶かし込んでゐる。

四

詩人の情感は一度は必ずセンチメンタルでなければならぬとわたしは思つてゐる。この作の基調は明らかにセンチメンタルだ。しかし、作者のセンチメンタルリズムは直ちに人情の上に醸された幼稚なセンチメンタルリズムではない。主として自然の無關心に對して、儂い人生を眺めた時に、自然の偉大を讚美する心のうちに醸されるセンチメンタルリズムである。ナチュラリスチックセンチメンタルリズムである。

ムである。

しかし、このセンチメンタルリズムを生かすに方つて、作者は時々センチメンタルな表現に落ちた所がある。結末に近く、ルウインズに對する感慨を乗客達や若い小學教員などに言はせたところは其の甚だしいものである。

思ふにさういふ感慨は、描いた事實が既に内部に持つてゐる。暗示に止めておいても讀者は等しく感じたであらう。わざわざ言葉にしたのは、殊に繰返して言葉にしたのは、確に蛇足に近い。

田山さんの事

田山さんが亡くなられた。鬱然とした大木が倒れて、俄に一方の空が空虚になつた淋しさだ。

○

五月十三日の——といへば、その日の午後四時四十一分には全く眠るが如くに息を引取られたのだが——その日の拂曉、最後に苦しい息の間から田山さんはきれぎれにわたしにいはれた。

「ふよふよ、君、お別れだ。ただ、もう一つの作が出来なかつたのが残念だ。それが出来れば、自分の仕事は全く完成したのだが、たうとうそれが出来なかつた。

それが残念だが、仕方がない。」

この作といふのは明治維新の際の士族の没落を一大長篇に書かうとしたもので、その腹案は可なり久しい以前から持つてゐられたのである。をととしの暮、いよ／＼それに着手されようとした時に腦溢血に罹つたので、その時にも非常に落膽されたが、その後、幸ひにこれが快方に向はれたと思ふと、今度は更に一層恐るべき喉頭癌といふ強敵の埋伏に出逢つて、つひにそれと戦ひきれずにたふれたのである。

明治維新の際の士族の没落は、今日のインテリゲンチヤの運命を暗示してゐるとも見られるのであるから、この作は多分現代にアツピールするものとなつて現れて、更に作者の一新生面を開いたかも知れなかつたのだが、惜しいことに、折角長い間かかつて集めた知識や材料なども、つひに生かされることなくしてしまつたのである。

○ 腦溢血について喉頭痛といふ二大敵に對して、田山さんの戦はれた戦ひは實に必死的であつた。斷じて生きるといふ強い自信は今月の八日まで完全に續いてゐた。勿論、その間、常に非常な不安におびやかされ通したことはいふまでもないのであるが、先月二十四日以来、全く流動食になつてしまつてからさへ、なほ且つその自信を失はずにゐられたのである。

先月十八日にお目にかかつた折などは殊に元氣がよくて、もう少したつたら、氣候もいいしするから、久しぶりで熱海のベ吉のところへ一しよに行つて見ようなどといはれたくらゐであつた。無論、そのうちにはもつとずつと快くなることを信じてゐられたのである。ベ吉といふのは、以前、向島の方にゐた老妓で、三味線が非常にうまく、田山さんが二十年近くもひいきにしてゐた一人である。わたしも宴席でしばしば出會つてよく知つてゐたのであるが、それが震災に遭つて

以來轉々して、今はそのつれあひで幫間をしてゐた延壽といふぢいさんと共に、熱海の來宮神社（のみや）の邊に延壽旅館といふのを營んでゐるのである。

ベ吉達の知らせによると、夫婦が番頭にもなり、料理番にもなり、お座敷の方をもやつて、でも女中の二三人くらゐはつかつてゐる小旅館らしいのだが、靜かな部屋もあるといふことだから、ゆつたりした氣持で、氣がおけずにもられるのを取得に出かけて見ようといふのであつた。

「向島で鳴らした妓が、轉々して、あすこまで行つた形に人生がある。」

例の口癖の「人生」をここにも出して、田山さんは彼れらの上に何か特別の興味を寄せてゐられるやうでもあつた。

それくらゐに健康の回復を信じてゐたのが五月八日の一度の發作で、忽ち何もかも一切が急變したのである。

五月八日の發作は非常に激烈なものであつたさうだ。朝のうちは、『婦人畫報』の懸賞短篇小説の選なぞしてゐられたくらゐで、氣分もさう悪くはなかつたらしいのだが、十一時ごろから、俄に非常に苦しまれて、熱も四十度三分までのぼり、全身脂汗をかいて、身のやりどころも置きどころもないといふ有様で、僅かに苦悶のうめき聲を立てられたばかりであつたといふことである。さういふ最中でも、尿意が起ると、寝たまゝで取らせることを嫌つて、起きて、立つてなされたといふから、まだく戦はうとする意氣だけは持つて居られたのだが、腦溢血の方の佐多博士、癌の方の山川博士、それに近所の醫師が立會ひで手當をされて、一時、鎮靜を得た後になつて、始めて全く覺悟をなされたらしい。

その後は生きる爲の注射などすら拒まれたくらゐで、全く自然のままの死に身を委さうとされたやうだ。喉から流動食さへ全く攝取することが出来なくなつた後に、醫師が葡萄糖の注射をしようとした時などにも、すでに確かに死ぬことに

きまつてゐるのに、さういふことをして多少の時間を延ばすといふことは自分は好まない。しかし、周圍のものがそれをしてほしいといふなら、一ぺんだけは任す、といはれたさうで、斷じて生きるといふ意氣で戦つた難苦戰に一旦敗れた以上は、潔く死なうといふのがその最後の態度であつたのである。

○

八日の發作の後には、さすがに餘程まゐつたらしく、「これだけ苦しんでも、まだ死ねないのか」と歎聲を發せられたさうだが、十二日の午後、わたしが枕頭に行つた時には、「まだこのまゝ死ぬやうな氣がしない」と、自由に利く方の右手で、あの廣い高い額をなでながらいはれた。額にはもう全く脂氣もなく、皮膚はかさ／＼してゐた。わたしはその時、その右手の上に自分の手を添へて握るやうにして見たが、あの大きな強い手だつた手が、柔かで、ぐにやつとして、全く弾力のなくなつてゐたのに驚かされた。わたしが心から、これはいけないと感じた

のはこの時であつた。なにしろ患部が喉頭のことであるから、呼吸の困難は想像以上であつて、そばで見てもなぞゐられたものではなかつた。わたし達は病室の書齋から折曲つた廊下を隔てた客間の方に居たのであるが、荒い呼吸は手に取るやうにそこまで聞えて來た。

しかし、頭は實にはつきりしてゐた。苦悶の眞つ最中でもなほ且つ常にクリヤーであつた。をととの暮の發病以來、長い間の大患であつたのだが、その間に、わたしが頭に故障が生じたのではないかと、ふと不安に思つたのはただ一度しかなかつた。それは去年の一月中旬、佐多病院に入院して數日後のことである。その日は自分でもしきりに頭の事を氣にして居られて、「たとひ體が治つても頭がだめになりはしまいか」と繰返されたが、この時の話に限つて、妙に何もかもがすべて猛烈な性的の興味にのみ傾いて行つたのである。勿論、世間普通の漫然たるわいだんではなく、心理に深くからんでの話であつたが、それがますます深くな

ればなるほど、わたしは不安に感じながら、聞いてゐたのであつた。ところが、その翌々日に、多少の不安を抱きながら病院に行つて見た時には、もう全くふだんの頭に復つて、前々日の田山さんはあれは本當の田山さんであつたか知らと思はれたほどに、けろりと變つてゐた。

○

田山さんとわたしとの關係は、明治三十九年二月、博文館から『文章世界』が創刊されることとなり、その主筆である田山さんの下に、わたしが記者として入館することになつた時からである。その前にも一二度お目にかかつた事はあつたのだから、全くの初對面ではなかつたが、坪内先生の添書を頂いて、忘れもしない二月五日の夕方、初めて牛込の北山伏町のお宅へ伺つた。矢來の酒井邸の眞裏に當る邊で、庭も可なり廣かつたやうである。すぐに書齋に通されたが、その時、わたしは記者として採用されることになるかどうかのわかれ目のつもりでゐたの

と、一つは坪内先生から入館についての訓戒を受けたばかりの足で余丁町から焼餅坂へと出て行つたのだから、すこぶる神妙に控へてゐると、田山さんは無造作に挨拶が済むか済まないかに、「文章世界第一號立案」と題した巻紙に書いた三尺ばかりのものを、いきなりばあつとわたしの前にひろげていはれた。

「ほゞこんな風にやらうと思ふんだが、どうだらう？ なにかもつといゝ考へはないだらうか？」

今から思へば、あのせつかちな人であつたのだから、不思議でも何でもないのだが、その時のわたしはちよつと呆氣に取られた。では、もう自分は記者になつてゐるのかなと自分で心に訊いて見なければならなかつたからである。

そのうちにビールが運ばれたりして、試験を受けに行つたつもりわたしは、大いに御馳走になつて、その夜は歸り、翌日から本町の博文館のはうへ勤め出したのである。

その時から、もうかれこれ二十五年の餘にもならうが、この長いおつきあひの間に、わたしはかつて一度も小言をいはれたこともなければ、勿論、喧嘩をしたこともない。たゞし意見の相違で顔を赤くし合つて論争したことはたび／＼であつたが、さういふ時にも、田山さんはいつも「僕はかう思ふ」を強く語尾につけて押しきらうとはなされたが、それでもこちらが承服しない時には、無理に屈服させようとはしなかつた。考へて見れば、わたしのやうな片意地な、いふ事を聴かない者をよくこの長い間、あいそをつかさずに一しよに連れて來られたものである。

主筆と記者との關係で始まつたのであるから、わたしはつひに一度も面と向つて「先生」と呼んだことはなかつたが、田山さんもまたわたしを待つに門下を以てせず、いつも年下の友達をもつてせられたやうである。けれども、この人生における同行者としていかに多くの影響を受けたかといふ點では、恐らくはわた

しなぞはその随一人でもあらう。

○
門下に對する態度やその他については、わたしはいつもはたから見えてゐる人であつたから、可なりよくその奥の奥まで知つてゐるやうな氣がしてゐる。大正二年の一月だから、もう十八九年の昔になるが、白石實三君がその養家の都合で東京へ出て來ることがむづかしくなりかけた時に、その才を惜むのあまり、わざわざ上州の安中在まで雪の中を出かけて行つて、——わたしもその時一しよに行つたが、——そこに一泊して養父を説いた時のことなどは、今でもわたしは思ひ起すと涙が出る。

その時、白石君の細君——森田思軒の令嬢——はまだ若いお嫁さんで、古びた田舎家の大きな圍爐裡端に乳呑兒を抱へてゐた。その色の白い、田舎の人とはあまりにもちがつた姿は今もわたしの眼にあるが、その乳呑兒であつた幸子といふ

子が、いつの間にか成長して、この數日前に結婚された時に、田山さんは病床からお祝ひの手紙を送られた。そしてその手紙こそ實に田山さんの絶筆であつたのである。

○
田山さんには二十四五年前から常に影に添つてゐた一人の女性がある。その女性の存在によつて幾つかの傑作が生れ、愛慾觀が出來、その人生觀も成立つたといつてもいいとわたしは思つてゐる。田山さんの初期からの作品を、その時々を対象となつた女性といふ方面から考へて見るといふことにも、わたしは興味と意義とがあると思つてゐる。

花袋氏と讀書

わたしの書棚にモウパッサンの英譯の短篇集が幾冊か並んでゐる。今からちよつと三十年ばかり前に、さかんに輸入された“The After-Dinner Series.”といふ頗るお粗末な、假綴の、汚い本なのだが、その中に三冊だけ、扉に「花袋」といふ藏書印の押してあるのがまじつてゐる。わたしは特にこれを大事にしてゐる。

どうして田山さんの藏書印のある本がわたしのところにあるのか、そのわけはあとで話すが、この短篇集が十冊か十二冊、安いシリーズで出版されてゐるのを、丸善の二階に備へつけてある大きな書目の本で田山さんが初めて知つて、すぐに注文して、それが到着したのが、「忘れもしない、三十六年の五月十日頃であつた」

と、田山さんは『東京の三十年』の中に書いてゐる。その頃、田山さんは博文館で『太平洋』を編輯してゐた。丸善から電話でそれを知らされると、もうゐても立つてもゐられなかつたが、受取つて来るには金がなかつたので、出版部長の内山正如氏に泣きついて、『美文作法』を書く金の中から十圓前借して、降りしきる雨を衝いて丸善へ出かけて行つた。

これが我が國にモウパッサンの短篇集が十二冊揃つて輸入された最初であつて、田山さんは自分が日本での最初の讀者であり得たことを非常に喜んでゐる。

「私はページを切るのもまどろこしいやうな氣がして、それに讀み耽つた。私の思想と眼と體とは、この十二冊の短篇集に依つて、どんなに深い驚異に撲たれたであらうか。……私はガンと棒か何かで頭を撲たれたやうな氣がした。思想が全く上下を顛倒させられたやうな氣がした。……私はその本を一刻も傍を離さずに、博文館に通ふ途中にも、これをポケットに入れて行つた。編輯の餘暇にも讀めば、

車の上でも読み、床の中でも讀んだ。何といふ傾倒——とまでいつて、氏は其時に受けた影響のいかに大きなものであつたかを語つてゐる。

ところで、わたしはこの田山さんの、興奮した、感激に充ちた敘述のうちに、氏の讀書の仕方をさながらに見るやうな氣がするのである。氏が性急で、生一本で、ぐん／＼進む力をもつてゐたことは有名だが、この特質は、氏の讀書の上にも常に遺憾なくあらはれてゐた。思ふに、このモウパッサンの短篇集に對した時にも、やはりさうであつたらう。その何十何百といふ短篇を、恐らく、氏は片端から、勇敢に、もり／＼と、蠶が桑の葉を食べるやうに讀み破つて行つたことだつたらう。そして其中から榮養を十分に取つて、ずんずん其身を肥らせて行つたことだつたらう。そして成長すると皮を脱いで、また成長をつゞけて行つたことだつたらう。

けれども、これを今もわたしの手許に残つてゐる書物の上に見ると、そこには

何の痕跡をもとゞめてゐないのである。一つの書入れもなければ、一つのアンダーラインも引いてないのである。たゞ目次の一つ二つに、筆でつけたぞんざいな墨の○じるしが、たま／＼氏が特に深く心を留めた作であつたことを示してゐるのであらうと思はしめるだけである。

しかし、記憶は實によかつた。その時から凡そ五六年も経つた明治四十一二年のころだが、わたしが頻りにモウパッサンを讀み耽つて、その短篇をぼつ／＼翻譯しかけたりした時に、田山さんはよくあの作、この作と、その何十何百の中から幾つも作品をあげて、その梗概を語られたが、實に大體を擲んで、少しも要領を間違へられなかつた。

○ 田山さんは所謂藏書家といふほうではなかつたらう。珍本とか贅澤本とかいふ部類の書物などには、殆ど興味をもたれたとは思はれない。本は讀むべきもの、

讀んで其身を肥しさへすれば、あとは必ずしもこれを保存しておくには及ばないとすら思はれてゐたやうである。三十九年に、『文章世界』を創刊した初めころは、その「文範」といふ欄に、田山さんもよく執筆されたが、——後には、全部をわたしが書いた。——或號に、蘇東坡の小品を七篇ほど抜いて、それに田山さんが一々短評をつけて載せたことがある。後にわたしと共著の『新古文範』にこれが收められてあるから、こゝに其本文の一つを寫してお目にかけるが、

書贈孫叔靜

今日於叔靜家。飲官法酒。烹團茶。燒衙香。用諸葛筆。皆北歸喜事。

といふやうな短いもので、中にはもう少し長いものもあるにはあつたが、又、

書天慶觀壁

東坡飲酒此室。進士許毅甫自五羊來。邂逅一杯而別。

といふやうな、ずつと短いのもあつた。『蘇長公小品』といふ和綴の四冊本から、

とび／＼に氣に入つたのを選まれたので、初めの二三は、それでも一々寫してゐたが、そのうちに面倒臭くなつたのだらう、いきなり剪刀を執つて、じよきじよきと原本を切り出した。わたしは呆れて見てゐた。田山さんは切取つた紙片を原稿紙に糊で張つて、そのあとへ短評を書き添へると、次のをまたじよき／＼と切つて行つた。

「惜しいぢやありませんか。僕が寫しませう、」とわたしは言つた。

「なあに、もういゝんだよ、此本は。ここで使つてしまへば、あとはもういらないんだから。」

「だつて、切らなくともいゝでせう。本文は短いんだから。」

「なあに、」と田山さんは糊でまた張りつけながら重ねて言つて、「あとは、欲しかったら、君に上げよう。」

そしてまた其次のを切つて行つた。

『蘇長公小品』四冊は、かくして其時からわたしの愛蔵に移つたが、ところ／＼に極めて無恰好な疵痕——説明を聞けば、もとの持主の性格の一端が窺へるやうな疵痕——を残してゐる。

ところで、モウバツサンの短篇集だが、このほうは、明治四十二三年ごろであつたと思ふ、田山さんが英譯の全集を買はれたので、嘗てあれほどまでにも傾倒してゐた歴史的な短篇集もいらなくなつたところから、わたしにくれようといはれたのだが、此時には、わたしも既に何冊かは自分で所蔵してゐたから、足りない分だけを分けて戴いたのである。それが果して三冊だけであつたかどうか、其後、わたしはモウバツサンの短篇集の幾冊かを人に貸し失くしてしまつたので、其中にも歴史的の「花袋蔵」が入つてゐたかも知れないのである。

○
讀書は年齢によつて變遷する。田山さんも少年時代は漢文、漢詩で育てられて、

其頃の唯一の投書雑誌であつた『穎才新誌』に、漢詩などを投書して、それが誌上に載せられるのを天にでも昇つたやうに喜んでゐたさうだが、青年の頃には、もとの同藩士で、内務省の官吏の息子の野島金八郎といふ——後に副領事とかになつた——人が、不思議と西洋の近代文學の知識をもつてゐて、しきりに新文學を鼓吹したため、此人に感化されて、早くから西洋の小説などを澤山に讀み耽つたのである。硯友社のさかなな頃に、早くすでに田山さんは、この野島氏の書齋から借り出して、ユーゴー、デュマ、デッケンスなどの小説をわからずなりに日課にして讀んでゐたといつてゐる。

やがて、ゾラ、ドウデエ、コツベ、ロチなどからトルストイ、ドストエフスキイ、ツルゲーネフ、それからモウバツサン、フロオベール、ゴンクウル、イブセン、ニイチエ、ハウプトマン、ズデルマンといふやうに、ますます廣く涉獵して、自然主義文學を唱道する下地をつくつて行つたらしいのだが、しかし、又、

わが國の古典にも一通りは通じてゐた。殊に晩年になつてからは、『大鏡』だの、『蜻蛉日記』だのの話がよく出た。藤原氏の榮華を題材にして一大長篇を書きたいともよくいはれた。多分、多少はその構想をもしてゐたことであつたらう。

和歌は夙に桂園派の直系である松浦辰男に學んで、其高弟の一人に數へられてゐた。自分の藝術の寫實的傾向は此師匠の歌論から得たといつて差支ないと思つてゐたくらゐである。桂園派の傳統は、田山さん自身か、柳田國男氏か、でなければ、薩摩の大島のはうへ行つてゐた土持なにかが、これを承け繼ぐべきだが、といふ話をもしてゐたくらゐで、田山さんの和歌は、自分では決して餘技などではなく、だいふ本氣でゐた時もあつたのである。歌人では熊谷直好が好きで、『浦のしほ貝』を推奨してゐた。又、『新葉和歌集』をも愛誦してゐた。

が、歌は、ともかくも『花袋歌集』の一冊があるからまだいゝが、今わたした

ちが惜しく思つてゐるのは、氏の漢詩が原稿のまゝで空しく遺族の手に藏されてゐることである。氏は中年の頃から、簡単な日記をよく漢文で書いてゐたが、晩年には、日記代りに漢詩を作つたといつてもいゝやうな形になつてゐた。およそ二千五百首くらゐにのぼつてゐるが、古體、近體、五言、七言、とりまぜて、田山花袋の風格を最もよく偲ばしめるものが、或ひはそこにありはしないかといふ氣がしてゐる。

誤られた逸話

逸話は、多くの場合において、正面きつての傳記などよりも遙かによく其人の「人間」を傳へるものだが、やゝもすれば誤り傳へられて、却つて其人の「人間」をまで誤り傳へることがある。古人の逸話などでも、どういふわけか、二様三様に書物に出てゐるものがある。今日において、すでに全く其眞實をきはめることの出来なくなつてゐるものは止むを得ないが、寧ろ甚だ容易にすら正し得られるものは、機會を得てこれを明かにしておくのが、その誤りを知つてゐる者の義務ではなからうか。わたしはさういふ意味から、自分が親炙した田山花袋氏の逸話の誤傳を少しくこゝに正して見る。

○

當然、田山さんの事なら眞實を傳へてゐると思はなければならぬやうな人の書いた書物の中に、田山さんが『蒲團』を書かれた時分の逸話を書いて、其中に、「小栗（風葉）が、中年の戀を書くさうだ。僕が話したことを書くのかも知れないが……」と田山さんがいつたといふ言葉が出てゐる。聞いたといふ當人が書いてゐるのだから、これは信じなければならぬはずなのだが、しかし、わたしはこれを信じない。「僕が話したことを」といつたといふのを信じない。恐らくは其人の記憶ちがひであらう。田山さんといふ人は、決して大事な私生活を人に話したりするやうな人ではなかつたからだ。實に、斷乎として固く「自己」を守つた人だつたからだ。他人の生活を尊重して、決してそれに介入しようとしなかつた代りに、自己の生活にも斷じて他人を關與せしめない人だつたからだ。況して『蒲團』の題材となつた事は、作者自身が、「世間に對して戦ふと共に自己に對して

も勇敢に戦はうと思つた。かくして置いたもの、壅蔽して置いたもの、それと打明けては自己の精神も破壊されるかと思はれるやうなもの、さういふものをも開いて出して見ようと思つた。」とまで言つて告白してゐる大事の體驗であるに聞いてをやだ。どうしてこれを軽々しく他人に話したりする筈があらう！ 殊に況んや小栗氏は、當時、田山氏に取つては當面の最大のライヴァルであつたに對してをやだ。斷じてさういふ打明話などしよう筈がない。

これにつゞいて其書物には、田山さんが、『蒲團』を急いで一週間で脱稿して、締切も來てゐたので、最初は題をつけずに渡したと書いてある。すると、勤めてゐる博文館のはうへ、『新小説』の編集部から電話がかゝつて、原稿は組みへまはしたが、題を早くつけてくれないと、間に合はんといふので、咄嗟に電話口で『蒲團』とつけたと書いてある。

が、これは少々とんでもなさすぎる話である。

その『蒲團』の命題については、わたしも其時意見を徴されたが、それよりも先づ作者自身が此作の思ひ出を書いてゐるのを見よう。

田山さんは、その『東京の三十年』の中に、「私のアンナ・マール」といふ一項を設けて、其中に、この作を十日ほどで脱稿したが、「もしこれをかの女が讀んだら」と思ふと、氣がさして、原稿は渡さずにおいたと書いてゐる。題もうまくつかなかつたので、また一日二日経つたと書いてゐる。すると、『新小説』の主筆のGから社へ電話がかゝつた。

「出來てゐます。」

「ルビは振つてあるでせうな。」

「え。」

「題は？」

「蒲團。」その朝途中で考へた題をつい言つてしまつた。

「フトン？」

先方では一寸わからぬやうなので、

「あの寝る蒲團のフトンです。」

「さう、蒲團……なら明日取りに上げますから……」

で、いよいよ渡すことになった。仕方がないと思つた。そしてその翌日は原稿を持つて来て渡した、と書いてゐる。Gといふのは後藤宙外氏である。

わたしが相談を受けたのは、この電話で話した直後である。後藤氏には『蒲團』と言つたが、まだ心は決しきらなかつたのである。

「蒲團……蒲團といふのは變だらうか。蒲團の匂ひを……主人公が女の蒲團の匂ひを嗅ぐところが、しまひのところにあるんだがね……」

田山さんは編輯局の向き合つたテーブル越しに、そのころのいつもの癖で、ぱつと赤くなつた顔をいくらかきまりが悪いといふやうに目ばかり大きく見はつて

ゐた。

「戀と戀といふのが一番いゝんだけれど、小杉（天外）君がすでにつけてゐるんだ。……蒲團の匂ひといふ方がいゝだらうか？」

いかにしても突然のことと、わたしが何とも返辭をしかねてゐると、田山さんは例の性急でまたつゞけた。「つかないんだよ、どうしても。いやに月並の題はつけたくないし、と言つて、蒲團……はあんまり露骨だし、やつぱり蒲團の匂ひのはうがいゝか知ら？……」

「いや、蒲團の匂ひよりは蒲團のはうがいゝでせう。ちよつと何のことか見當もつかないけれども……だが、一たい何を書いたんですか？」

「いや、なあに……」

田山さんは言葉を濁して、更にまた考へついた別の題でも書き並べて見ようとするやうに、前に擴げた原稿紙に向つて、硯箱の中から秃筆を執つて齒で嚙んだ。

その時の、その有様が、今もわたしの頭にはありありと浮んで見える。實に、この時『蒲團の匂ひ』などといふ妙に思はせぶりのな題を解消して、端的に『蒲團』とつけたところに、從來のセンチメンタリズムからナチュラリズムへの躍進過程が示唆されてゐるとも見る事が出来るであらう。

○

『蒲團』が發表されて、作者の名聲が一時に高くあがると、『新小説』の編輯者は、もと／＼反自然派の文士であつたから、『蒲團』の内容が甚だ非道德だといつて、自分で検事局へ訴へ出たので、作者は呼び出されて取調べを受けたといふことが、やはり右の書物に載つてゐる。が、これもまた、とんでもない話である。編輯者が自分の編輯した雑誌に載せた作品の作者を告發もしくは告訴するといふことは、同時に自分自身を告發もしくは告發することであつて、理窟としても、事實としても、およそ有り得べからざる事である。

が、それなら、全然それに似た事實もなかつたかといふと、いや、それはあつたのである。春陽堂は確かに田山さんを告訴したが、それは『蒲團』を他の諸短篇と共に『花袋集』と題する一冊の單行本として他の書店から出版したので、それを版權侵害として訴へたのである。即ち『蒲團』は春陽堂で發行してゐる『新小説』に掲載するために書かれたものであつて、春陽堂はこれに對して、すでに相當の原稿料を支拂つてゐる。版權は明かにこちらに在る。しかるに、無斷で作者が他の書肆から出版したのは版權侵害であるといふのであつた。

今日から考へると、理不盡な、非常識な言分のやうに聞えるけれども、著作権や發行權の限度がまだ明かにされてゐなかつた時分のことと、そのころの慣例によれば、著作権は原稿料と引替に當然先方に移るものと思はれてゐたのであるから、春陽堂の言分は必ずしも不當でも不合理でもなかつたのである。

で、検事は双方を呼び出して、慎重に事情を聴取し、法文をも詳しく検討した

末、つひにこれを不起訴にした。その理由は、定期刊行物における著者の寄稿は、これが掲載を承諾しただけであつて、著作権を譲渡したものではない。従つて、これに對して支拂はれた原稿料は、その時限りの掲載料として認むべく、將來にわたつて永くこれを左右する権利の代償とは認むべきものでないといふのであつた。

これが一つの判例となつて、爾來、著者は一度雑誌や新聞などに掲載したものを自由にどこからでも出版し得るやうになつたのである。いつて見れば、『蒲團』は一方で新興文學のエポックメイキングの作品であつたと同時に、他方、著作権の確立に對してもまた大きな寄與をしたものであつたともいへるのである。

この時の検事は、小原直氏であつた。後に大臣にまでなつた人だけに、さすがにえらかつたらしい。田山さんは検事局へ行つて來ると、いつもきまつて感心して言つてゐた。「まだ若い人だが、實に頭のいい、情理の通つた物言ひをする人だ。」

○
検事つて、君、なかなかえらいんだね。」

田山さんがせつかちで、そゝつかしやであつたことは本當だが、マッチを羊羹とまちがへて、がちつと噛んだ話などでも、その書物に傳へてゐるやうに、人の家を訪ねると、「先客があつたと見えて、客間に菓子皿がおいてある。『羊羹か、一ついただかう』と、いきなりつまんで噛んだらマッチだつた」といふのでは、いかにも不作法で、曲がなさすぎる。これは明治三十九年で、まだ電燈もなければ、ガスも燈火用には一般に使はれてゐなかつた時分のことである。或晩、國木田獨歩が經營してゐた芝の櫻田本郷町の獨歩社の二階に、田山さんをはじめ四五人の者が集つて、賑かに談笑してゐた。座には羊羹の盛られた菓子鉢が出てゐた。

暫く經つての事である。銀座を一まはり歩いて來ようといふので、みんなが出